

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第764集

# 博 多 93

— 博多遺跡群第133次調査報告 —

2003

福岡市教育委員会

## 正誤表

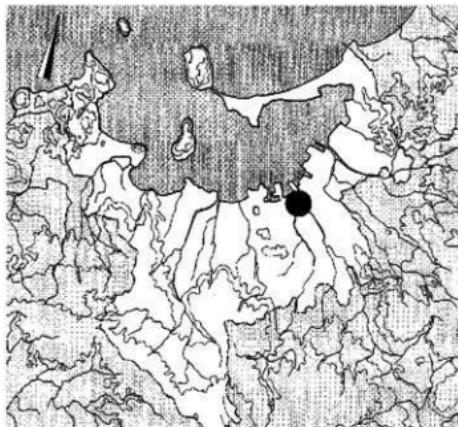
(福岡市埋蔵文化財調査報告書第764集『博多93』 2003)

頁	行	誤	正
1	35	注 (I)	注 (I) 碓望・下山正一ほか 1998 「第4章 博多遺跡群をめぐる環境変化」『福岡平野の古環境と遺跡立地』 pp. 69-113 (p. 3)
17	2	それより新しい。	それより古い。
21	図 39	M179	土壙 179
		M181	井戸 181
		M183	井戸 183
24	図 49	(バースケール) 2m	1m

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第764集

はか  
博 多 93

— 博多遺跡群第133次調査報告 —



調査番号 0128  
遺跡略号 HKT-133

2003

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は、その形成に長い歴史の道筋をたどって今に至っています。そのなかで核となる地域のひとつが博多です。

博多はこんにちもなお活発な活動により変動を遂げています。その結果、地下に残る過去の活動の跡が埋蔵文化財として目の目を見ることになりました。福岡市教育委員会では、工事によりやむなく破壊される埋蔵文化財については、記録による保存を図ることとし、博多遺跡群についての発掘調査を継続してまいりました。第133次調査もそのひとつであり、本書においてその成果を公刊することとなりました。

ここに至るまでには、株式会社東方土地をはじめとする関係各位の多大なご理解とご協力があったことをここに記し、心からのお礼を申し上げます。

また、本書が、博多遺跡群についての理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

## はじめに

- 1 本書は、2001年度(平成13年度)、福岡市博多区祇園町355-1地内において、福岡市教育委員会がおこなった、博多遺跡群第133次発掘調査の報告である。
- 2 発掘調査は、文化財保護法57条の2に基づく届出を受け、株式会社東方土地から福岡市教育委員会が業務委託を受け、文化財部埋蔵文化財課が実施した。調査にあたって、株式会社東方土地、清水建設株式会社を始めとした関係各位から種々のご協力とご配慮を頂いた。この場で深く感謝申し上げる。
- 3 発掘調査・整理・本吉編集は、教育委員会文化財部埋蔵文化財課杉山富雄が担当した。遺物実測は、名取さつき・坂田邦彦がおこなった。動物遺体の同定・検討については屋山洋の協力を得た。挿図・淨書では、阿部泰之の協力を得た。
- 4 出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理し、利用に供する予定である。

## 凡 例

- 1 位置の記録には、「博多地区遺跡基準点測量委託測量成果簿(1992)」の成果を利用した。
- 2 報告中では、遺物、遺構に対して調査中の記録、整理作業に際して付した通し番号により表記し、これを登録番号とする。
- 3 図中に用いる方位は、国土地理院の座標北であり、真北から0度19分西偏している。
- 4 遺物実測図は、特に記さないかぎり、縮尺3分の1で図示している。その外の縮尺の場合は、遺物番号に続けてそれを付記した。
- 5 本文中陶磁器の分類表記は下記によった。

横田賀次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』〔Dで表記〕  
中形・大形の陶器については

森木朝子 1984 「博多出土貿易陶磁器分類表」『福岡市高遠鉄道関係埋蔵文化財調査報告(IV) 博多』  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集〔Hで表記〕

遺跡調査番号	0128		遺跡略号	IHK-T-133
調査地番	福岡市博多区祇園町355-1		分布地図番号	49(天神)
工事面積	322 m <sup>2</sup>	調査対象面積	300 m <sup>2</sup>	
調査実施面積	285 m <sup>2</sup>	調査期間	2001年10月10日～2001年12月26日	

## 本文目次

I 博多遺跡群第133次調査の経過と概要	
1 調査に至る経過	1
埋蔵文化財事前審査	
発掘調査	
2 発掘調査地点の立地と周辺の調査	1
博多遺跡群第133次調査地点の立地	
3 発掘調査の経過と調査成果の概要	3
発掘調査の経過	
土層と調査面	
出土遺構	
II 発掘調査の成果	
1 第1面出土上の遺構と遺物	
土壙 9	9
土壙 10	11
土壙 11	12
土壙 12	14
土壙 13	17
土壙 14	18
土壙 93	19
土壙 179	20
井戸 181	21
井戸 183	22
土壙 203	23
土壙 205	24
土壙 223	25
井戸 241	25
土壙 271	26
土壙 272	26
2 第2面出土の遺構と遺物	
土壙 86	28
遺構 95	30
遺構 96	30
遺構 115	30
井戸 134	32
遺構 135	32
土壙墓 153	33
溝 154・155	34
土壙墓 176	34
3 第3面出土の遺構と遺物	
溝 103	35
竪穴住居 157	36
竪穴住居 158	38
竪穴住居 159	39
竪穴住居 161	40
竪穴 275	43
III まとめ	44

## 挿図目次

図 1 博多遺跡群の位置(1:50,000) .....	1
図 2 第133次調査地点の位置(1:5,000) .....	1
図 3 1区第1面の遺構(北から) .....	2
図 4 2区第1面の遺構(北から) .....	2
図 5 3区第1面遺構(南から) .....	3
図 6 第1面の遺構(1/100) .....	4
図 7 第2面の遺構(1/100) .....	5
図 8 第3面の遺構(1/100) .....	6
図 9 1区第2面北端遺構(東から) .....	7
図 10 3区第2面遺構(西から) .....	7
図 11 3区第3面遺構(西から) .....	7
図 12 1区第2面北端遺構(東から) .....	8
図 13 2区第3面遺構(北から) .....	8
図 14 土壙 9(1/40) .....	9
図 15 土壙 9(南から) .....	9
図 16 土壙 9出土遺物(1/3) .....	10
図 17 上壙 10(1/40) .....	11
図 18 土壙 10出土遺物(1/3, 1/2) .....	11
図 19 土壙 10上層(1/40) .....	12
図 20 土壙 11(1/40) .....	12
図 21 土壙 11土層(1/40) .....	12
図 22 土壙 11(南から) .....	13
図 23 土壙 11出土遺物(1/3) .....	13
図 24 土壙 12(1/30) .....	14
図 25 土壙 12(東から) .....	14
図 26 土壙 12出土遺物 1(1/3) .....	15
図 27 土壙 12出土遺物 2(1/3) .....	16
図 28 土壙 13(1/40) .....	17
図 29 土壙 13出土遺物(1/3) .....	17
図 30 土壙 14(1/40) .....	18
図 31 土壙 14(西から) .....	18
図 32 土壙 14出土遺物(1/3) .....	18
図 33 土壙 93(1/40) .....	19
図 34 土壙 93(西から) .....	19
図 35 土壙 93出土遺物(1/3) .....	19
図 36 上壙 179(1/40) .....	20
図 37 土壙 179出土遺物(1/3) .....	20
図 38 土壙 179(東から) .....	20
図 39 井戸 181・183土層(1/80) .....	21
図 40 井戸 181(1/60) .....	21
図 41 井戸 181・183(東から) .....	21
図 42 井戸 181出土遺物(1/3) .....	22
図 43 井戸 183(1/60) .....	22
図 44 井戸 183出土遺物(1/3) .....	22
図 45 上壙 203(1/40) .....	23
図 46 土壙 203(東から) .....	23
図 47 土壙 203出土遺物(1/3) .....	23
図 48 土壙 205(南から) .....	24
図 49 土壙 205(1/40) .....	24
図 50 土壙 205出土遺物(1/3, 1/2) .....	24
図 51 土壙 223(1/40) .....	25
図 52 土壙 223出土遺物(1/3) .....	25
図 53 土壙 223(南から) .....	25
図 54 井戸 241(1/40) .....	25
図 55 井戸 241出土遺物(1/3) .....	26
図 56 土壙 271(1/40) .....	26
図 57 土壙 271(南から) .....	26
図 58 上壙 271出土遺物(1/3) .....	27
図 59 土壙 272(西から) .....	27
図 60 上壙 272(1/40) .....	27
図 61 土壙 272出土遺物(1/3) .....	27
図 62 土壙 86(1/40) .....	28
図 63 上壙 86・井戸 134・遺構 135(北から) .....	28
図 64 土壙 86出土遺物(1/3, 1/4) .....	29
図 65 遺構 95(1/20) .....	30
図 66 遺構 95(西から) .....	30
図 67 遺構 95出土遺物(1/3) .....	30
図 68 遺構 96(東から) .....	31
図 69 遺構 115(1/40) .....	31
図 70 遺構 115(北から) .....	31
図 71 遺構 115出土遺物(1/3) .....	31
図 72 井戸 134(1/40) .....	32
図 73 遺構 135(1/40) .....	32
図 74 井戸 134・遺構 135(南から) .....	32
図 75 遺構 135出土遺物(1/3) .....	33
図 76 土壙墓 153(1/40) .....	33
図 77 土壙墓 153(北から) .....	33
図 78 潟 154・155(1/80) .....	34
図 79 土壙墓 176(1/40) .....	35
図 80 土壙墓 176出土遺物(1/3) .....	35
図 81 土壙墓 176(西から) .....	35
図 82 潟 103(1/80) .....	35
図 83 壺穴住居 157(1/60) .....	36
図 84 壺穴住居 157(北から) .....	36
図 85 壺穴住居 157出土遺物(1/3) .....	37
図 86 壺穴住居 158(1/60) .....	38
図 87 壺穴住居 158(西から) .....	38
図 88 壺 172(西から) .....	38
図 89 壺穴住居 158出土遺物(1/3) .....	39
図 90 壺穴住居 159(1/60) .....	39
図 91 壺穴住居 159出土遺物(1/3) .....	40
図 92 壺穴住居 161(1/60) .....	40
図 93 壺穴住居 161(東から) .....	41
図 94 壺穴住居 161出土遺物 1(1/3) .....	41
図 95 壺穴住居 161出土遺物 2(1/3, 1/2) .....	42
図 96 壺穴 275(1/60) .....	43
図 97 壺穴 275(東から) .....	43
図 98 壺穴 275出土遺物(1/3) .....	44

# I 博多遺跡群第133次調査の経過と概要

## 1 調査に至る経過

### 埋蔵文化財事前審査

2000年11月14日付けで博多区祇園町355番1地内における事務所ビル建築計画について、福岡市教育委員会に埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。埋蔵文化財課では、計画地の試掘調査を実施し、埋蔵文化財を確認していたことから、当該計画内容について原状での保存措置の検討を行った。しかし、工事計画の内容から地下の埋蔵文化財に対する影響は避けられないものと判断し、やむなく記録保存の措置をとることとした。

### 発掘調査

記録保存のための発掘調査は、株式会社東方土地の委託を受けて福岡市教育委員会が実施することとなった。教育委員会では文化財部埋蔵文化財課を担当として、準備工事の完了を待つて2001年10月10日から博多遺跡群第133次調査として現場作業に着手した。

発掘調査は工事の掘削が及ぶ範囲300mを対象とした。山止め工事及び表土働き取り並びに撤出について、事業者から現物での提供を受け、調査は対象地を3区画に分けて進めた。最終調査区での作業を完了したのは、2001年12月26日である。調査に際しては安全のための引きをとるなどしたことから、最終的な調査面積は285m<sup>2</sup>となった。

## 2 発掘調査地点の立地と周辺の調査

### 博多遺跡群第133次調査地点の立地

本地点は埋没地形からすると、博多遺跡群が立地する3列の砂丘列のなかでも最奥部の砂丘列(砂丘Ⅰ)上に位置し、中でも本地点は砂丘間の低地に面した傾斜地に立地していたと考えられる<sup>④</sup>。現況も博多湾に向かって奥側(南東側)が、前面側(北西側)より0.5mほど高い。調査区前面の地盤高は標高5.2mほどである。



図1 博多遺跡群の位置 (1:50,000)



図2 第133次調査地点の位置 (1:5,000)



図3 1区第1面の造構(北から)



図4 2区第1面の造構(北から)

### 3 発掘調査の経過と調査成果の概要

#### 発掘調査の経過

調査地は、幹線道路に面した間口 10 m 奥行き 30 m ほどの細長い平面形で、基盤の砂丘後線にたいして長軸が直交する方向に位置している。

調査にあたっては、試掘調査の成果をもとに、調査地奥側の現況地盤から 1.4 m までの深さを表土として鏝き取りった。鏝き取りについては事業者の協力を得、作業中立会して断面を観察したが、明確な遺構などは確認できなかった。

調査区は、廃土置き場の確保、廃土移動のための重機の進入路、機材搬入口の確保の必要から調査対象範囲のうち、出入口部（3 区）を除く北半部を 1 区、南半部を 2 区とした。調査は 1 区から進めた。1 区終了後ここに土砂を反転し、2 区と 3 区は一部並行して調査した。（図 3～13）

#### 発掘調査成果の概要

**土層と調査面** 矢板内の表土を鏝取ったことから、調査開始面以上の土層については、出入口部（3 区）の北壁（北西に面する）を、調査開始面以下については 2 区の東西壁を示す（図 6・7）。

1 層 表土層で、3 区北壁では地表下 1 m までが黒褐色土である。粗砂が混り、粘土味が強い。人為的な客土であろう。2 層とは不整合の関係にある。井戸 181・183 の上に位置し、その覆土との境界が不明確である。下面に焼土の薄層が見られる場所がある。井戸 181 ほかは 1 層に掘り込み面をもつものか。表土鏝き取りでは 1 層までを除去し、第 1 面として調査した。

2 層 黒褐色の砂層で、粘土が混じる上部の 2a 層と混じらない下部の 2b 層とに分けることができる。両者の境界は不明瞭である。奈良時代以前の遺物が出土する。地山砂層上にあり、砂層との境界は不明瞭である。2 層掘り下げ中に検出した遺構については第 2 面の遺構として調査した。2 層のなかに掘り込み面をもつと思われるが、確実な面として検出することはできなかった。第 3 面の遺構としては 2 層下底部から地山砂層面にかけて検出したものである。

**出土遺構** 台帳に登録した遺構は攪乱を除いて 281 基である。第 1 面とするもの 162 基のうち大半は柱穴を含む小穴である。根石、柱痕跡などにより柱穴とわかる遺構はごく少ない。土壙としたものは 37 基である。円筒形で覆土に灰層を顯著に挟むものが特徴的である。第 2 面とするのは 89 基あり、

溝、土壙墓が含まれる。第 3 面とするものは 30 基で、竪穴住居が 6 棟含まれる。

**出土遺物** 総量でコンテナ 80 箱ほどの分量となった。大半は土師器壺皿の類と白磁を主体とした輸入陶磁器で占められる。金属器には少量の銅鏡のほかに、鉄製箸？、古墳時代住居から鉈が出土した。石製品も砥石、石鍋など少量が出土している。

（1）調査 下山正一ほか 1998 「第 4 章 掘道遺跡群をめぐる環境変化」『福岡平野の古環境と遺跡立地』 pp.69-112



図 5 3 区第 1 面遺構（南から）

1 裸島 (尖端上部による)  
 2 黒褐色砂 (M242を含む)  
 3 2.4m (赤褐色砂)  
 4 2.5m (黒褐色砂)

M241 a 黒褐色砂  
M242 b 黑褐色砂  
M244 黑褐色砂

M243 a 黒褐色砂中に黑褐色土塊が混る。剖面  
 b 黑褐色土塊と白い砂の細かな粒状構造  
 M244 田舎合水層  
 c 黑褐色砂と黒褐色粘質土の細かい構造 (木炭の外観)  
 c灰 (塊状)

M244 a 黑褐色砂  
M245 黑褐色土  
M246 黑褐色砂

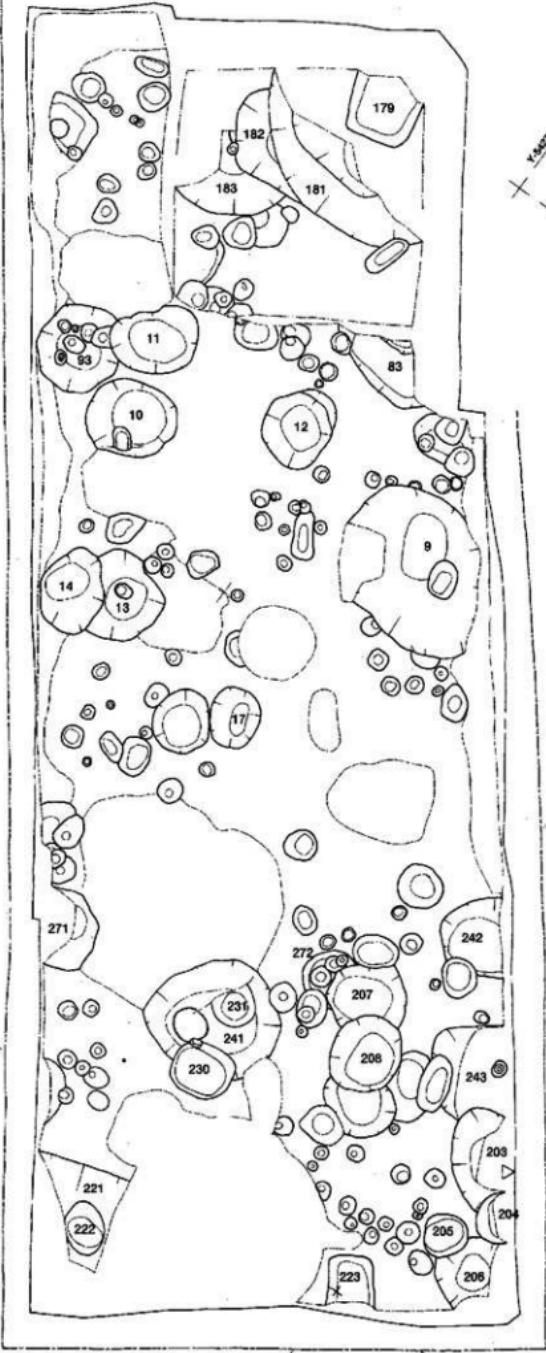
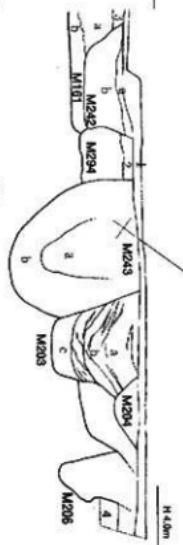


図6 第1面の造構 (1/100)

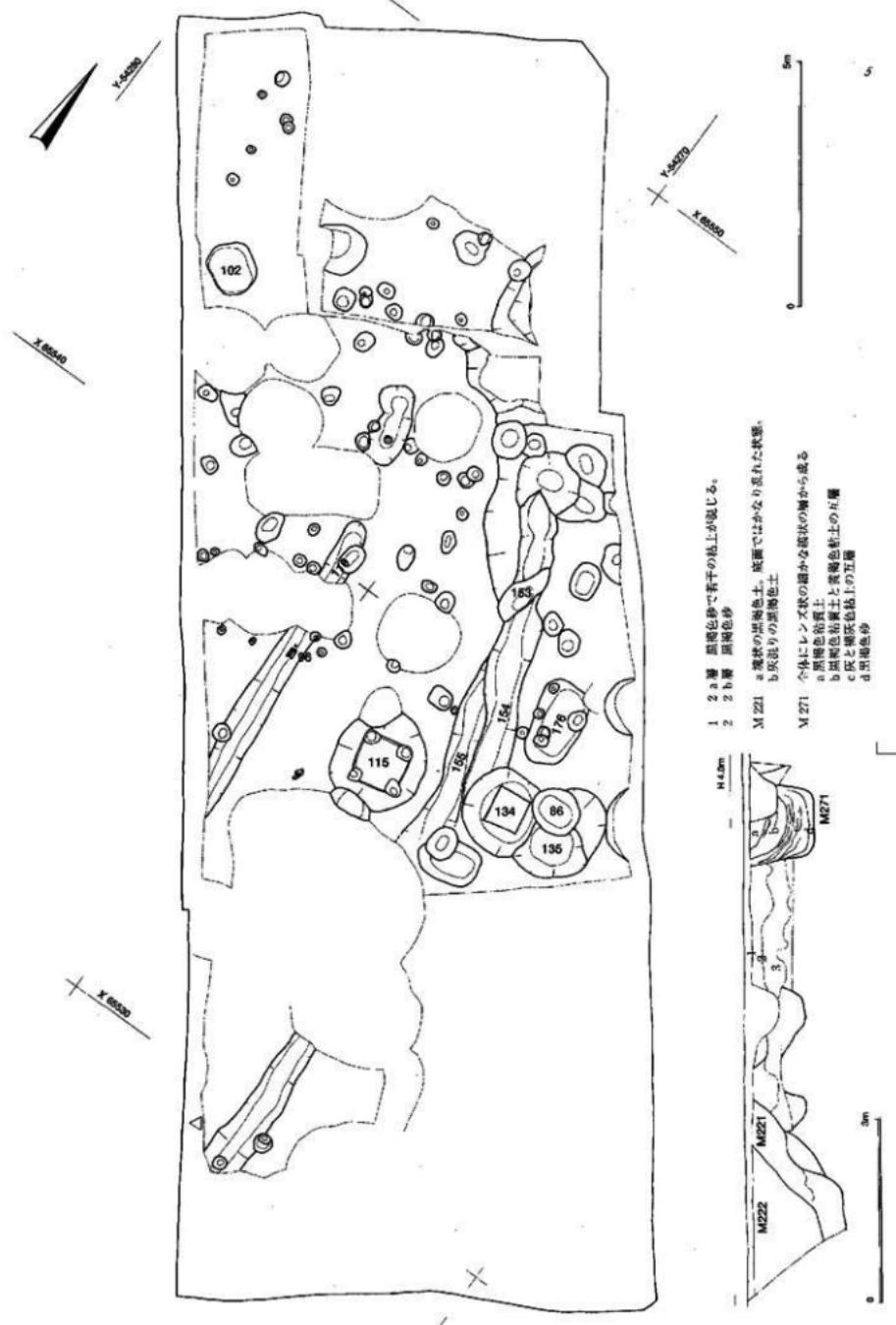


図7 第2面の選擇 (1/100)

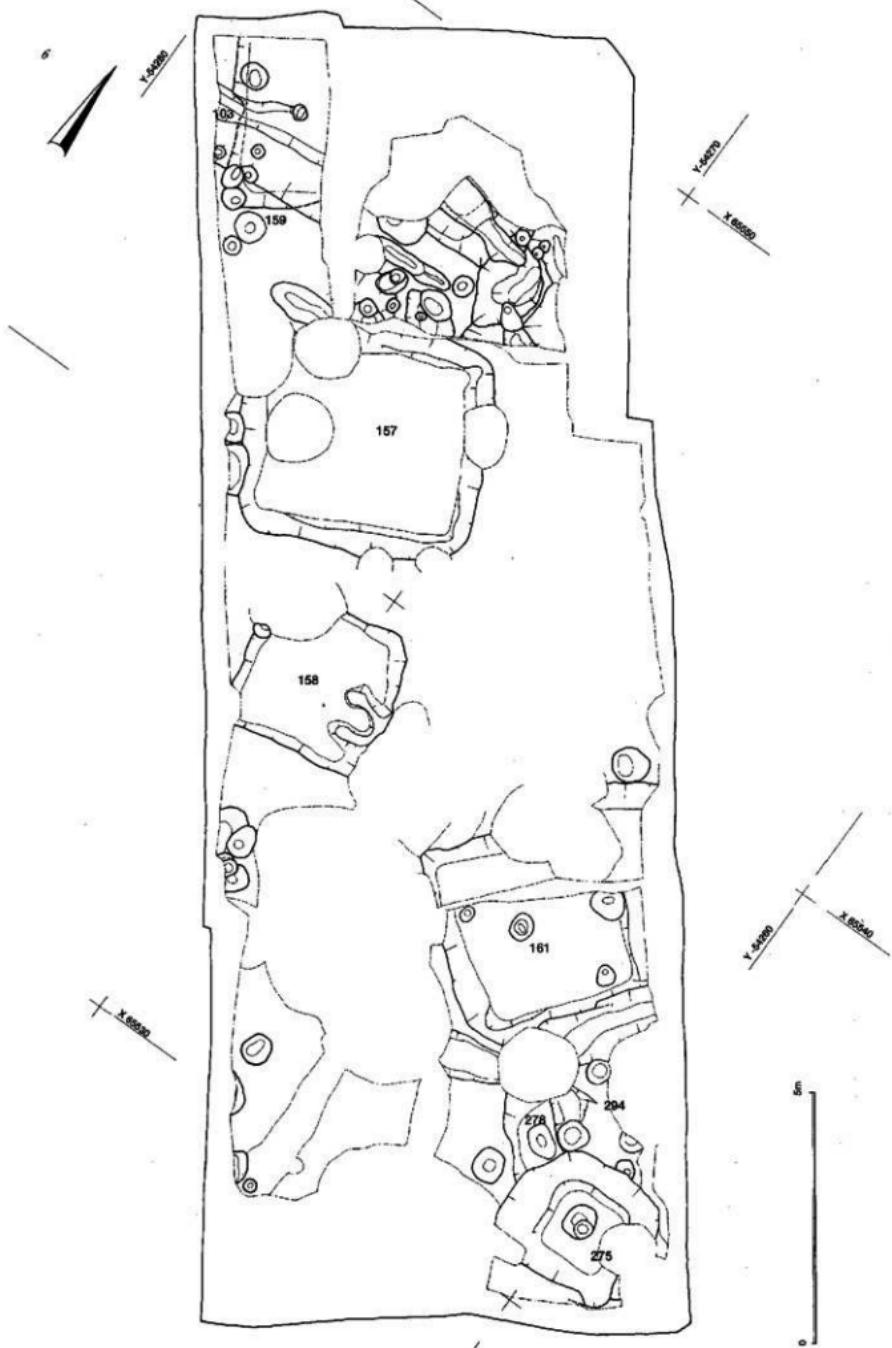


図8 第3面の造形 (L/100)

図 9 1区第2面北端造構(東から)



図 10 3区第2面造構(西から)



図 11 3区第3面造構(西から)



図 12 1区第2面北端造構  
(東から)



図 13 2区第3面造構(北から)



## II 発掘調査の成果

### 1 第1面出土の遺構と遺物

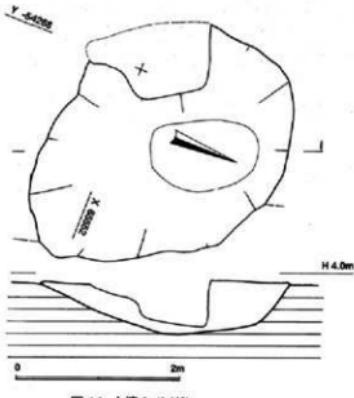


図 14 土壌 9 (1/40)

#### 土壌 9 ( 図 14・15 )

梢円形で深皿状の断面をもつ。覆土は黒褐色の粘質土で、上部では灰黄褐色粘土塊を多く含み、下部では焼土粒及び塊が混じる。一時に埋め立てられたものか。長さ 3.7 m、幅 2.8 m、深さ 0.7 m を測る。

出土遺物 ( 図 16 ) 覆土中位では、疊に混じって大破片の遺物が出土している。総量でコンテナ 1 箱ほどで、土師器坏皿が 1/3、残りの大部分は陶磁器である。

土師器坏皿は、ほとんどが細片となっている。いずれも糸切底で、内底面を横方向に撫で調整するが、外底面に板目は残らない。糸切底皿 860 は口径 9.0cm、糸切底坏 859 は同 14.4cm、857 は 15.0cm を測る。



図 15 土壌 9 ( 南から )

小形磁器類は、白磁と青磁がほぼ同量あり、多くは細片である。白磁碗は、D IV 類 (840)、D V 類 (806・839) のほかに D VII 類 (808) がある。806 及び 808 の外底面には墨書が残る。806 は「次」、808 は「徳綱」。白磁皿では D II 類 (850)、D VI 類 (844) がある。852 は内底面に花文を刻み、白濁する釉が厚くかかる。822 及び 844 の外底面には墨書が残る。いずれも一部の遺存で、判読できない。

青磁には龍泉窯系、同安窯系ほかがある。龍泉窯系青磁碗には D I - 2 類 (843)、D I - 4 類 (842) がある。同安窯系青磁碗には D III 類

(835)、D IV 類 (849) が、皿には D I 類 (836・837) がある。このほかに、内底面に目痕を残す碗 848、小形で外面下半部露胎となる碗 839 がある。

851 は青白磁皿、1011 は白磁小壺である。陶器には綠釉の鉢 855・994、のほかに内面施釉の鉢 (853)、擂鉢 (995)、捏鉢 (856) がある。854 は須恵器蓋である。二次的に移動したものであろうが全形を復元できる。

図示しないが埴輪とみられる細片がある。また、菅玉も出土している。

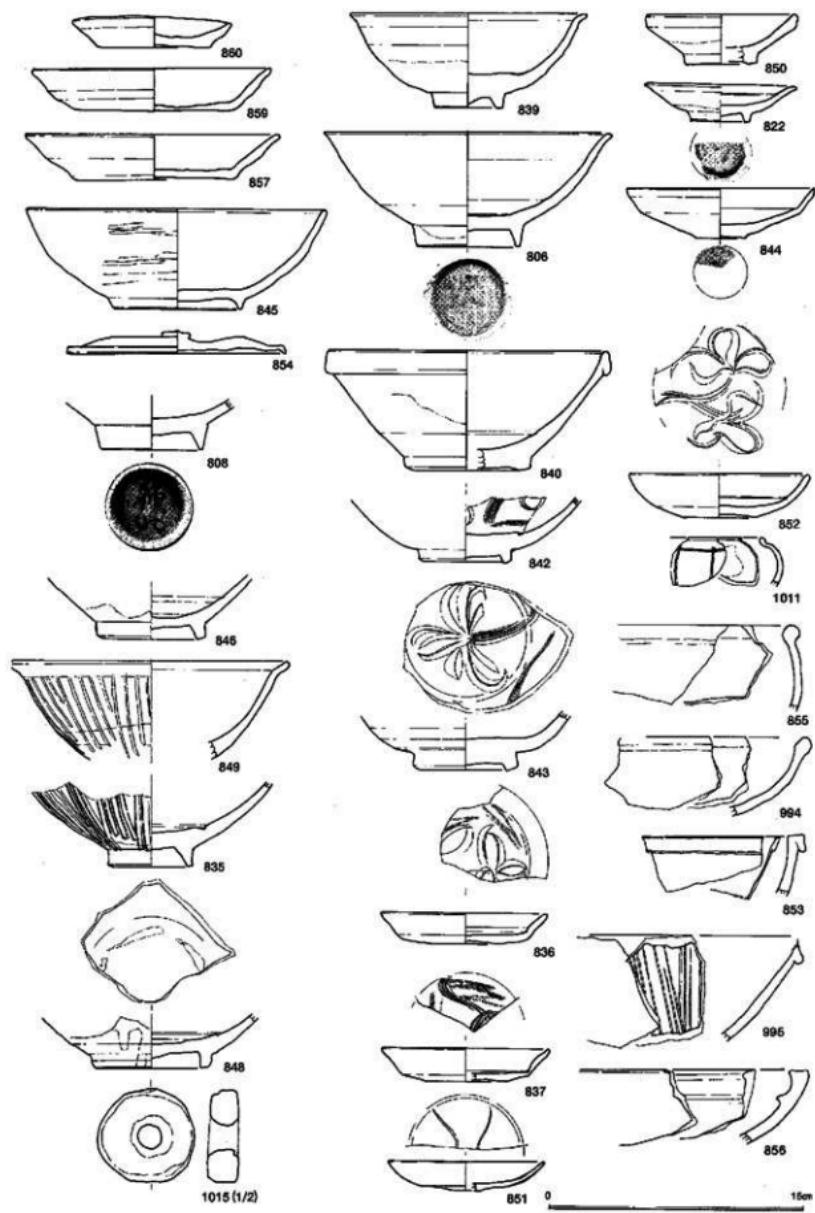


图 16 土壤 9 出土遗物 (1/3)

## 土壙 10 (図 17・19)

平面では円形の土壙で、断面は台形状となる。径 1.7m、深さ 0.9m を測る。同様の遺構 11・93 とごく近接している。覆土は暗褐色粘質土で、上部では黄褐色砂と繊維状の互層をなし、中位では灰層との互層となっている。灰層は一部で塊状となっている。

**出土遺物 (図 18)** 遺物はコンテナ 1 箱ほどが出土した。1/2 は土師器坏皿の破片で、残りの大半は陶磁器である。なかでも陶器類がやや多い。古墳時代前期以降の土師器、奈良時代を中心とした須恵器資料が含まれている。

土師器皿は笠切底が多い。皿 867・866・862 はいずれも笠切底である。口径は 8.8 ~ 9.5cm である。口径が平底の土師器坏はすべて糸切底で、内底面に撫で調整をおこなわない。図示する 863 は口径 12.0cm、865 は 12.4cm、864 は 13.0cm を測る。丸底坏 861 は口径 16.0cm を測る。外面に被熱したように煤状の付着物が残り、底面の器表が剥落している。

磁器類は青磁がごく少数みられるほかはすべて白磁である。

白磁碗では D IV 類 (871) のほかに D V 類の底部資料が目立つ。871 は内底面に櫛描きの文様を刻む (D V -4-b 類)。白磁皿は少量ながら、完存資料も含まれている。口禿の資料が含まれている。869 は底面まで釉が及ぶ。皿 870 は完存資料である。わ

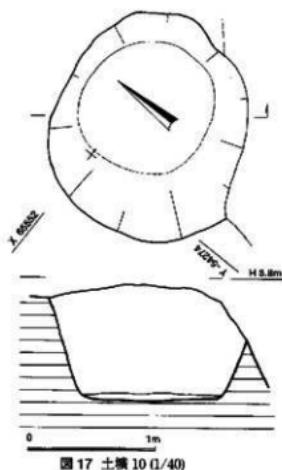


図 17 土壙 10 (1/40)

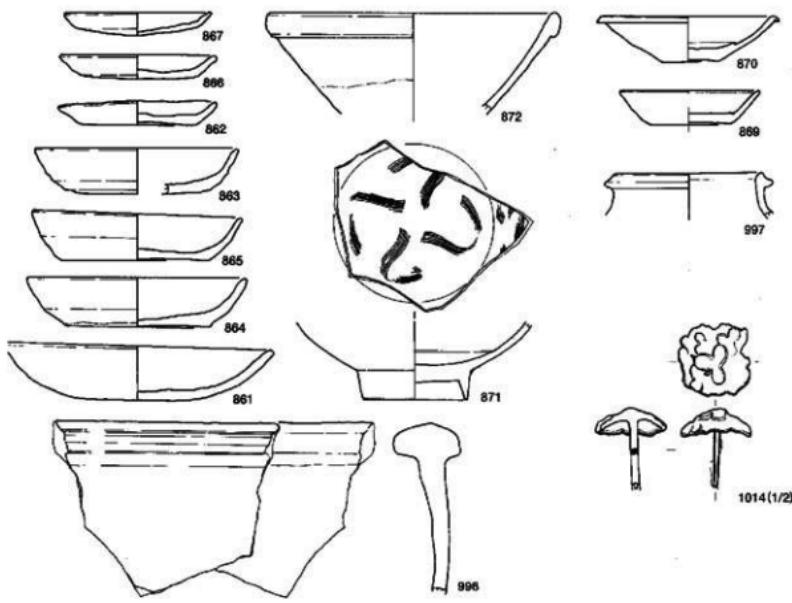


図 18 土壙 10 出土遺物 (1/3, 1/2)

すかに上げ底気味の小さな底部で、口縁部が反り返る。内底面に深い圓線を刻む。全面に施釉し、底面の釉を搔き取っている。口径 11.0cm、底径 3.5cm、器高 2.8cm を測る。

陶器類は、大半が細片で出土した。997 は鉄釉の広口壺、996 は褐緑色のガラス光沢をもつ釉を外面に施す大形の壺である。

国産陶器では、東播系捏鉢が細片で出土している。

金属器では銅製品 1014 が出土した。装飾のついた鉢で花弁状の立体的な透かし文様が認められる。

#### 土壤 11 (図 20 ~ 22)

土壤 93 と重複してそれよりも新しい。平面では梢円形状、断面は逆台形状となる。覆土は黒褐色砂質土で、砂層・灰層を輪状に挟んでいる。灰層のあり方により 6 部位にわけたが、その中位にはレンズ状に複数の貝(カキ)層を挟んでいる。また、この部位で白磁碗などが土層の傾斜に沿って滑り落ちたような状態で、完形で出土した。

確認面での長さ 1.7m、幅 1.4m、深さ 0.9m を測る。

**出土遺物 (図 23)** 遺物は総量でコンテナ 2/3 ほどの分量出土した。そのうち陶磁器が 1/2 ほどを占める。土師器坏皿は 1/5 の分量で、図示する資料以外は細片である。丸底坏のほかに糸切底、窓切底がある。878・877 とともに糸切底で、外底面に顯著な板目が残る。878 の口径 9.2cm、877 は 9.6cm を測る。

陶器と磁器は、ほぼ等量出土している。青磁は、全形を復元できる 874 のほか、同安窯系青磁細片がごく小量出土したのみである。874 は青磁碗である。深く、口縁端部が軽く外反する。内底面、対応する高台疊付に 5 カ所の日痕が残る。外底面に釉は薄く透明でガラス光沢もつ。胎土に粗粒砂を顯著に含む。口径 16.6cm、高台径 8.2cm、器高 8.2cm を測る。

白磁碗では D IV 類に 875、D V 類に 873 がある。875 は完存する資料で、口径 15.3cm、高台径 5.8cm、器高 6.6cm を測る。内底面に圓線あるいは段をもたない。

881 は白磁で、瓶の口縁部か。882 も白磁で、蓋である。鈎部下面から内面にかけて露胎となっている。

陶器はいずれも細片で盤(II 陶器 A 群)、耳壺(II 陶器 B 群)、捏鉢(II 陶器 C 群)がある。

東播系須恵器は捏鉢 998 のほかに、鉢と見られる口縁部細片 999 がある。

出土遺物の 1/5 は古代以前の資料で、須恵器の分量が多い。埴輪とみられる細片資料も含まれている。



a 黒褐色粘質土、黄褐色の殻層。

b 黒(黒色)と黄褐色、灰黃褐色粘質土の互層。

c 東播色砂層(黒色、灰褐色の粘土層を含む)。

d 黒褐、暗褐色粘土、灰黃褐色粘土との互層。

e 黄褐色砂中に黒褐色粘質土層が混じる。

図 19 土壌 10 土層 (1/40)

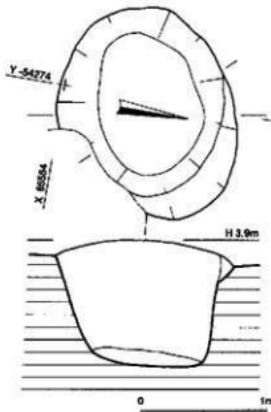
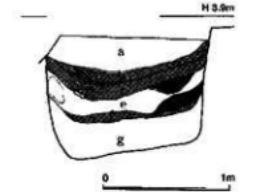


図 20 土壌 11 (1/40)



a 黒褐色土(沙泥り) 棒状に移・灰を挟む。

b 灰(灰色、褐色・灰色)の堅かな粘状地積。

かなり緻まる

c 黒褐色土(沙泥り) と灰の範疇兼積。

d 回層(カキ)。

e 黒褐色土(沙泥り)、山粒状。

f 山層(やや粗粒化)。

g 黄褐色砂中に黒褐色粘質土層が混じる。

図 21 土壌 11 土層 (1/40)



図22 土壌11(南から)

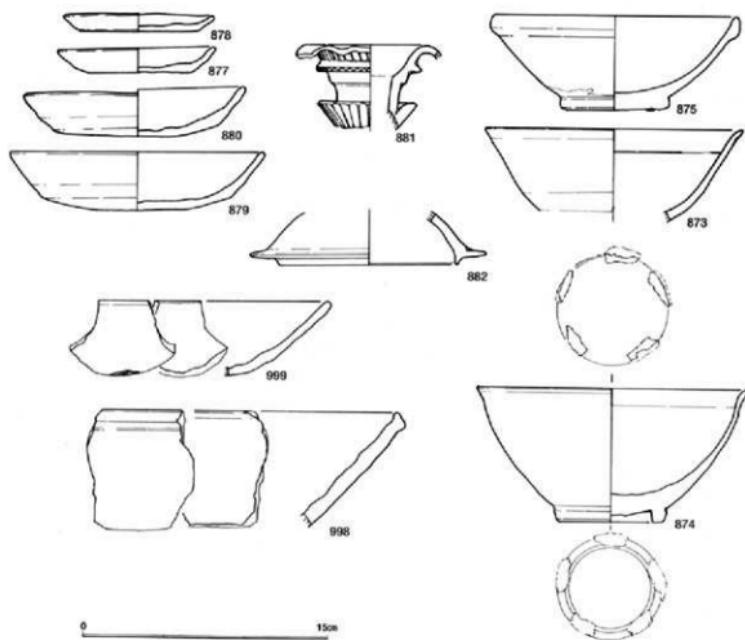


図23 土墳11出土遺物（1/3）

### 土壤 12 (図 24・25)

平面形が不整な円形状の土壤である。確認面では、覆土である軟質の暗灰褐色粘土の広がりが不鮮明で、平面形を確認することができなかった。断面は逆台形状を呈す。径は 1.4 m 前後、深さは 1.0 m を測る。

覆土の中位で、土師器壺皿が一括投棄された状態で出土した。土壤が半ば埋まつた状態で砾や土器片が投棄された状態となった後、落ち込んだ土砂の傾斜に沿って滑り込んだような状態を示している。さらに、その後一気に埋め立てられたのではなく、確認面での状態が示すように自然に埋没していったことが考えられよう。

**出土遺物 (図 26・27)** 先述したように覆土中から一括投棄された状態で土師器壺皿が出土したほかに、やや下位から確に混じて比較的大きな破片で、遺物が出土した。総量はコンテナで 3 箱ほどの分量となる。このうち 4/5 は土師器皿で、残りの多くは陶器類である。

土師器皿を図 26 上に示す。出土状態から完存するものが多い。すべて系切底で、内底面の撫で調整は行わないものも多い。行うものもごく軽く撫でている。したがって外底面の板目も無いか、かすかに残るのみである。実測した資料の計測値からすると、平均で口径 7.9cm、底径 5.9cm、器高 1.4cm となる。最大値は口径 8.8cm、底径 6.5cm、器高 1.9cm、最小のものはそれぞれ 7.4cm、5.2cm、1.1cm である。

土師器皿は図 26 下・図 27 上に、完存かそれに近い資料を示す。すべて系切底で、内底面の撫で調整も皿と同様行わぬか、ごく軽く撫でている。実測した資料の計測値からすると、平均で口径 12.5cm、底径 8.3cm、器高 2.8cm となり、最大値は口径 13.3cm、底径 9.0cm、器高 3.2cm、最小のものはそれぞれ 11.3cm、7.4cm、2.4cm である。

陶磁器は、少量の陶器のほかは小形の青磁・白磁である。青磁は龍泉窯系で、碗には D I-5-a 類 (908) のほかに、D I-5-a 類、D I-4 類、D I-1 類がある。いずれも細片である。皿には D III-1 類がある。小碗には D III-1-a 類 (907) がある。皿 993 は、内底面に描書きの文様を刻む。全面に施された釉は、灰青色透明でややガラス光沢をもつ。

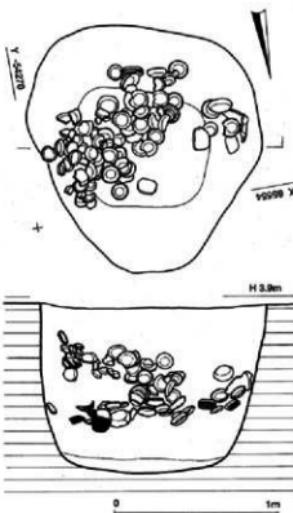


図 24 土壤 12 (1/30)



図 25 土壤 12 (東から)

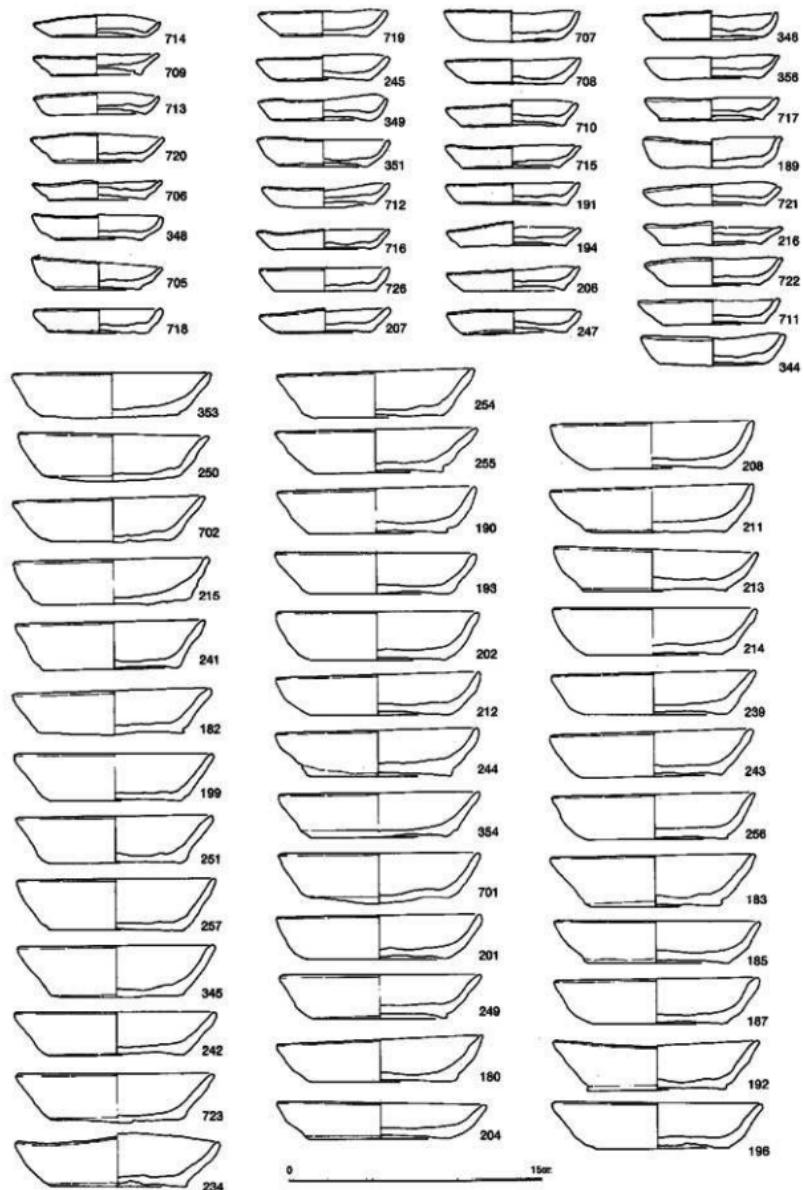


図 26 土塚 12 出上遺物 1 (1/3)

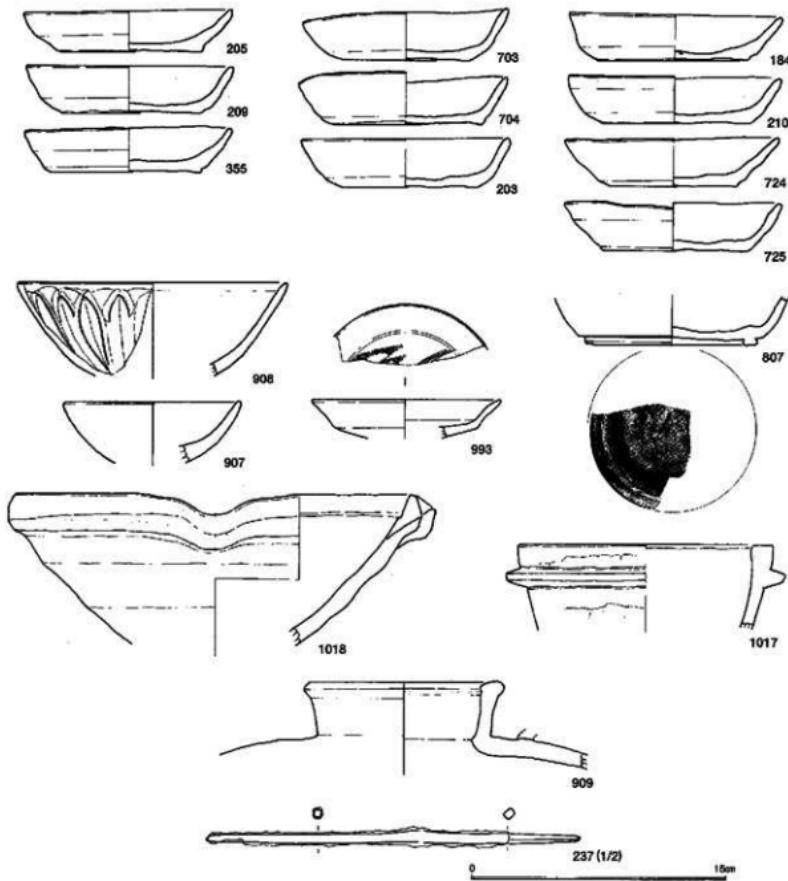


図27 土壌12出土遺物2(1/3)

白磁も細片である。続にD IV類のほかに、D VI-1類、D VII-3類がある。皿は口禿のIX類がある。

陶器909は、鉄軸を頸部内面まで施釉する。耳と思われる貼り付け部が残る。

東播系捏鉢1018は大破片の資料で、砾に混じって出土した。胎土は砂質で、使用による内面の磨耗が著しい。

石綱1017は、小形で、比較的薄いつくりである。

237は箸状の鉄製品である。鋸のため明確ではないが、両端が細くなっている。

古墳時代の十師器、奈良時代の須恵器が小量出土している。807は須恵器高台壺である。小破片の資料であるが、外底面に墨書きが残る。内容は判別できない。

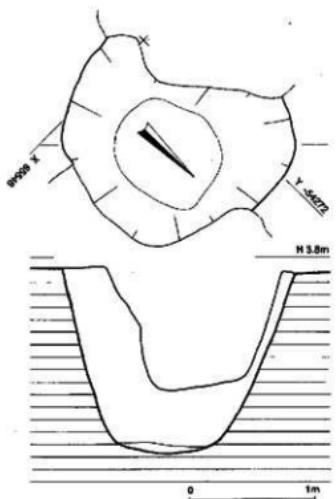


図 28 土器 13 (1/40)

## 土器 13 (図 28)

土器 14 と重複し、それより新しい。平面形は、不整な円形状、断面は逆台形状を呈す。覆土は黒褐色土で、これと灰層とが互層をなす。中央部がおおきく陥る。壁の一部が崩落し、大塊となって覆土下部に含まれている。覆土中位で大破片の土器が出土した。

出土遺物 (図 29) 総量でコンテナ 2/3 ほどの分量出土した。土器器皿が 1/5、陶磁器が 2/5 で、残りの大半は古墳時代から古代までの土器・須恵器である。

土器器皿は少量ある。886 は口径 8.5cm、底面が丸みをもつ。坏は全形を復元できる資料はない。885 は口径 15.8cm、884 は 16.0cm を復元できる。瓦器碗は完形に近い 890 を含む。889 の外側に撫で調整を行なうほかは、897、890 とも器表は蒐磨き調整で仕上げる。他の 2 点とはことなり、887 の蒐磨きは内底面に対して横方向のものが広く行われる。

陶磁器のうち、小形の磁器類は白磁が大半を占める。碗が多い。白磁皿 891 は底部近くの外側が露胎となり、体部中位の内側にわずかに段がある (D VI-1 類)。892 は底部以外の全面に施釉し、内底面に段をもつ。釉は乳白色不透明。

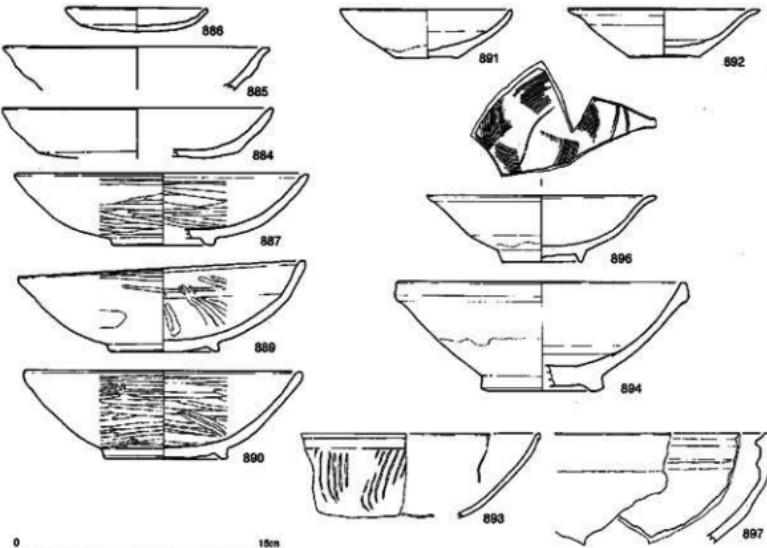


図 29 土器 13 出土遺物 (1/3)

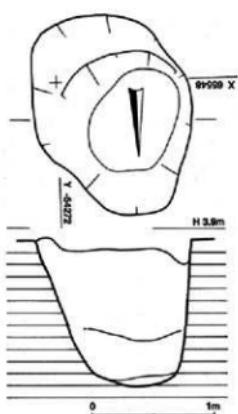


図 30 土器 14 (1/40)

碗は、口縁部、底部資料からみて D IV 類が最も多い。D V 類も含まれる。896 は高台近くまで施釉する (D VI - I 類)。894 は全体外面中位まで施釉する (D IV - I 類)。893 は器壁がごく薄く口縁端部を折り返して小さな玉縁としている。外面に荒い鉛描文を施す。釉は褐緑色で透明、ガラス光沢もつ。

陶器類は細片で出土した。897 は捏鉢である (H - C 群)。捏鉢に須恵質の摺鉢がある。

荒い格子目叩きの平瓦細片も出土した。

#### 土器 14 (図 30・31)

土器 13 と重複して古い遺構である。平面では梢円形状を呈す。断面の観察から埋まる過程で一方の壁が崩落した結果と観察された。もともとは同種遺構と同じく、円筒状の土器であったとみられる。覆土は黒褐色砂で、中位に固くしまった褐灰色の層を挟んでいる。繊状の灰層である。これより上位

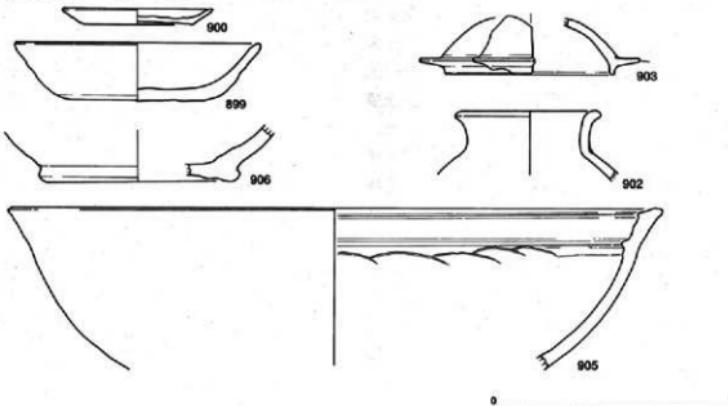


図 32 土器 14 出土遺物 (1/3)



図 31 土器 14 (西から)

の覆土中には焼土を顯著に含む。下位には炭の層を挟んでいる。

**出土遺物（図32）** 総量でコンテナ1/3ほどの分量が出土した。陶磁器が半ばを占め、土師器壺皿が1/4、残りの大半は古墳時代前期から古代にかけての土師器、須恵器が占めている。

土師器壺900は口径9.2cm、底径6.8cm、器高1.0cmを測る。系切底で、内底面に擦で調整を行う。

土師器壺899は、鋸切底で内底面を荒く鏡磨きし、底部がやや丸みをもつ。

陶磁器は陶器と磁器とが等量出土した。白磁には碗にD IV類、V類およびII類がある。壺ではD VI類とみられる資料がある。青磁は、同安窯系の碗、天目釉碗とみられる細片があるが、ごく少数である。白磁では蓋(903)、耳壺(902)の細片が出土している。大形の陶器類はH・C群の資料が主となっている。905は捏鉢である。

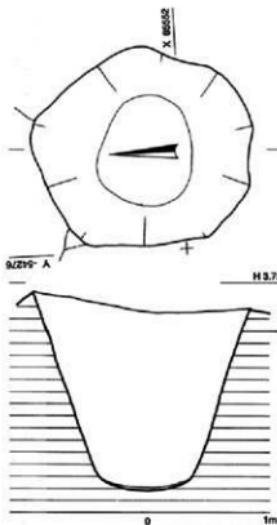


図33 土壙93(1/40)

#### 土壙93(図33・34)

同種の土壙11と重複してそれよりも古い。平面では円形、断面は逆台形状となる。造構上部の覆土は黒褐色粘質土で、境界の不明瞭な薄層が重なり、全体が弓状にたわむ。下半部は黒色土で灰が混じるものと観察された。細分できないが全体の土の流れはやはり弓状を呈す。覆土中位に黄褐色砂層が



図34 土壙93(西から)

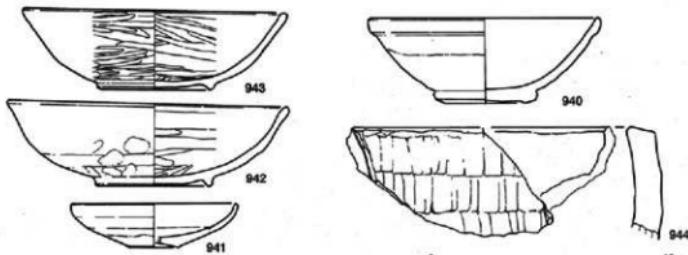


図35 土壙93出土遺物(1/3)

挟まれており、埋め立て途中の休止時間を示すものか。

**出土遺物（図35）** 覆土上位で銅鏡がまとめて出土した。遺物総量はコンテナ1/2ほどで、2/5が土師器壺皿、同量の陶磁器があるほかは石製品、瓦、古墳時代・奈良時代の土器類である。

土師器はほとんど細片である。丸底壺が顕著である。糸切底壺は径がやや大きい。瓦器は2個体分の資料が出土した。943は外表面とも荒く範磨きを行う。下半部外表面の器表は小さく火跳ね状に剥落している。942は外表面に撫で調整痕を残し、内面には荒い範磨きを加える。

陶磁器は半ば以上が白磁碗皿類で、残りは細片の陶器類である。

白磁碗には玉縁の940がある。体部外表面の下半は露胎である。内底面にも部分的に露胎となっている。釉は灰色半透明である。高台内面の削り込みはごく浅い。口径14.2cm、高台径6.4cm、器高5.2cmを測る。941は白磁皿である。釉は透明で体部下半まで及び、釉下に化粧土を施す。内面中位に段をもつ。

944は大形の石鍋である。口縁はやや内傾し、厚い。

銅鏡は11点あり、判読できた鏡面はすべて北宋鏡で「景德元寶」、「天聖元寶」、「治平元寶」、「元豐通寶」、「元符通寶」、「聖宋元寶」がある。初鑄年は11世紀初頭から12世紀初頭にわたる。

#### 土塙179(図36・38)

調査区壁に半ばがかかる遺構である。井戸181と重複して新しい。平面形は隅円の長方形となる。断面では浅い逆台形状となる。覆土は黒褐色粘質土で全体に一樣である。長さ12m以上、幅1.4m、深さ0.2mを測る。

**出土遺物（図37）** 遺物はコンテナ1/5ほどの分量が出土した。陶磁器が半ばを占め、土師器壺皿が残りの大部分を占める。

土師器壺皿はすべて糸切底で、皿がやや多い。細片のみである。

白磁はごく小量で、碗にD V類、さらに口禿のD IX類がある。945は白磁皿底部である。白濁する釉が外底面に及ぶ。平らな内底面外周に圈線をもつ。青磁は龍泉窯系の碗、壺、皿がある。946は壺下半部である。底部を除く全面に施される釉は発泡して明るい緑青色を呈す(D III-1類)。947は皿底部である。釉は厚く、純い黄橙色を呈す(D III-1類)。

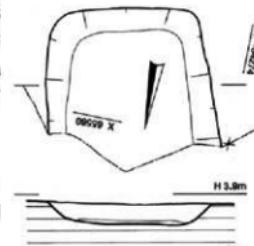


図36 土塙179(1/40)

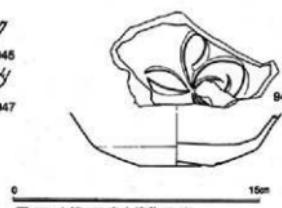


図37 土塙179出土遺物(1/3)



図38 土塙179(東から)

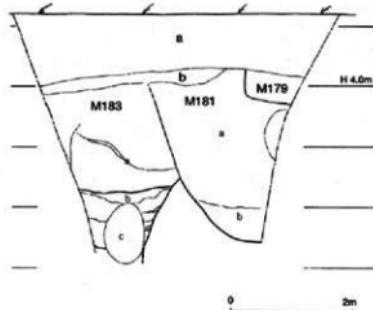


図 39 井戸 181・183 土層 (1/80)  
 a 樹立。  
 b 整地層(黒褐色土で灰褐色粘土・灰・  
 焙土混り)。  
 M179 黒褐色粘土土。  
 M181 a 黒褐色砂質土。  
 b 黑褐色砂。  
 M183 a 黑褐色砂質土。  
 b 黑褐色砂、黄褐色砂の互層。  
 c 井戸層(黒褐色・灰褐色粘土土)。

#### 井戸 181 (図 39 ~ 41)

調査区北西隅に位置する。井戸 182・183 と重複していすれよりも新しい。調査区北面の土層断面では、整地層下を掘り込み面とするようである。遺構の大部分は調査区外となり、調査区壁の法面に井戸側が現れる。井戸側の木質は腐朽し、円筒形の空洞とし残っている。平面形は径 4 m 以上の円形で、深さ 2.5 m (標高 1.5 m) の位置まで確認した。

出土遺物 (図 42) 掘形埋土からコンテナ 1.5 箱ほどが出土した。全体の 3/5 は陶器類である。

土器器坏皿類は 1/5 ほどの分量があり、ほとんどが細片である。糸切底で、坏は口径がやや大である。

陶器器のうち、白磁では碗 D IV-1 類が最も多い。ほかに D V 類、V 類がある。皿では D III 類、VI 類のほか、わずかに IV 類が認められる。825・834 は墨書の残る資料である。825 は細片で内底面の釉を輪状に搔き取っている。胎土は灰白色である。834 の胎土は白色、釉は透明である。

青磁は、龍泉窯系では碗に D I -1 類、I -5-a 類、皿に D II -5 類がある。同安窯系では碗 D I 類、皿に D I -1 類などがある。

陶器類も細片である。1006・1005 は擂鉢である。口縁端部を折り曲げて帯状に形成し、上部と外面の半ばまでに鉄軸を施す。内面に粗い搔き目を入れている。1007 は壺口唇部内面まで薄く鉄軸を施す。

1004 は須恵器鉢である。極軟質で器表の荒れが著しい。

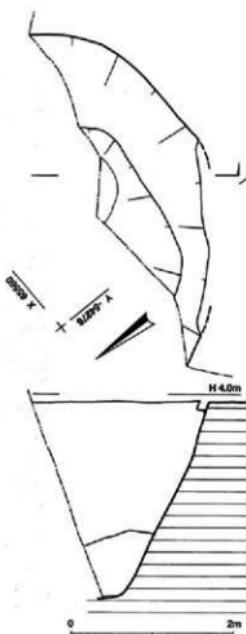


図 40 井戸 181 (1/60)



図 41 井戸 181・183 (東から)

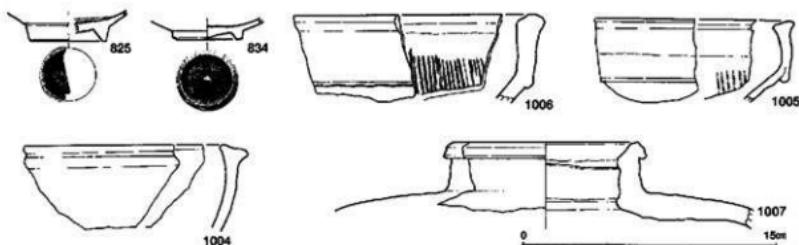


図 42 井戸 181 出土遺物 (1/3)

## 井戸 183 ( 図 39・41・43 )

半ばが調査区外に位置する。井戸 181・182 と重複し、そのいずれよりも古い。掘形平面は円形である。掘形埋土の上半部は黒褐色粘質土、下半では黒褐色粘質土と黄褐色砂層とが互層を成す。径 0.7 m の井戸側が調査区壁にかかって検出された。井戸側覆土は黒褐色ないし灰色の粘質土で、木質の井戸側は腐朽して痕跡のみとなっている。

**出土遺物 ( 図 44 )** 遺物は主に掘形埋土中から出土し、コンテナ 1 箱ほどの分量となった。全体として細片の資料であるが、磁器に大破片の資料が混じる。資料の 2/5 は、古墳時代から奈良時代にかけての土器である。土師器壺皿よりも陶磁器類が多く出土している。

土師器は細片のため図示できないが、器高は 3cm で、口径が 12cm ほどの器形が考えられる。陶磁器では、小形の器形では白磁に少量の青磁が混じる構成である。951 は平底で深い器形である。底部までかかる釉は白濁し不透明である。内底面は圓線を境に平らになっている。碗 953 は高台近くの下半部が露胎となる。釉は薄くかかり、透明でガラス光沢もつ。内底面は

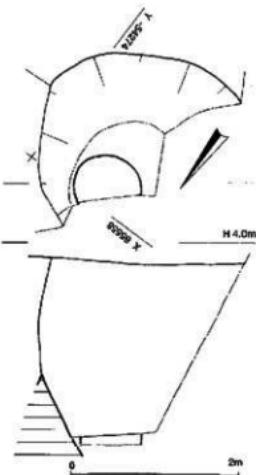


図 43 井戸 183 (1/60)

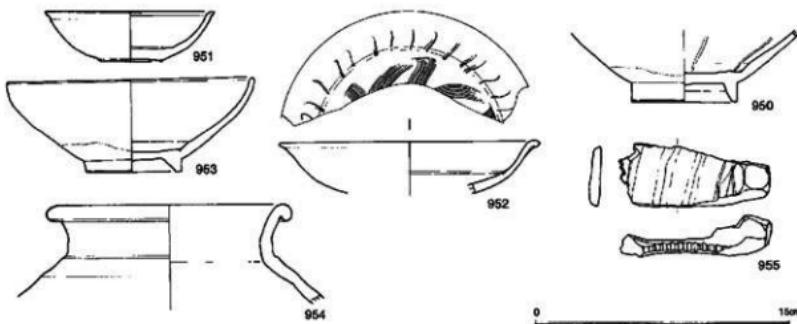


図 44 井戸 183 出土遺物 (1/3)

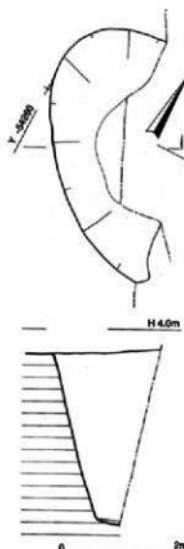


図 45 土壌 203 (1/40)

圓線を境として平らである。碗 952 の釉は白濁半透明である。体部中位内面に段がある。碗 950 は内底面外周が段をなし、白堆土による隆線をもつ。陶器も細片で、H・A 群の盤などのほかに、緑色の釉を施す壺 954 がある。釉は内面の頸部まで及ぶ。



図 46 土壌 203 (東から)

## 土壌 203 (図 45・46)

半ばが調査区外にある。平面形が不整な円形状の遺構である。断面は逆台形状を呈す。径は 2 m 前後となる。深さは 1.4 m を測る。土層断面は図 6 に示す。上部は黒褐色粘土と灰の互層が細かな縞状をなし、中位は明褐色砂と黒褐色粘質土が南から北方向に傾斜する縞状の堆積をなし、水流による堆積が考えられる。下位では底部まで塊状の灰で埋まる。

出土遺物 (図 47) 総量でコンテナ 1/3 ほどが出土した。細片がほとんどである。

土師器壺皿は全体として磨滅しており、二次的に移動したことが考えられる。大半が糸切底で、外底面に明瞭な板目を残す。皿には底径 10cm 前後の資料がある。皿 956 は、遺存状態が良好な資料である。糸切底で、口径 9.5cm、底径 7.5cm、器高 1.0cm を測る。

瓦器碗 958 の内底面には往復する粗い篦磨きが施されている。内面の全面に黒色の付着物がみられる。

白磁 957 は釉が高台部に及ぶ。釉は透明であるが、むらがある。底部近くと口縁部近くの内面に圓線をもつ (D V-4-b 類)。

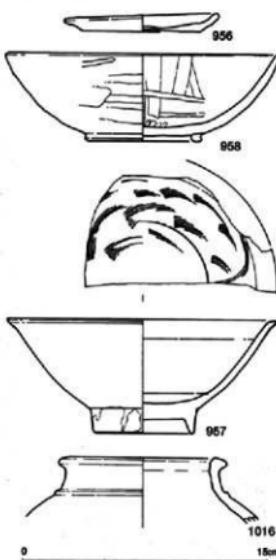


図 47 土壌 203 出土遺物 (1/3)

陶器には黒色釉の壺がある。釉は薄く、資料の全面に及ぶ。胎土は精良堅緻で暗褐色を呈す。



図 48 土塗 205 (南から)

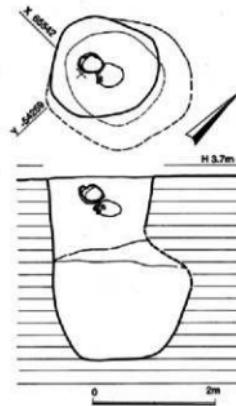


図 49 土塗 205 (1/40)

#### 土塗 205 (図 48・49)

平面が不整な円形を呈す。径が 0.8 m 前後と小さいが、1.5 m の深さがある。下半部が抉れたような断面となっており、調査中に崩落したので、詳細な形状は不明確である。復元して図示する。覆土は黒褐色粘土で、團粒状である。上部では灰層、粘土混りの灰層が弓状に大きくなつて抉まれる。下部には灰が堆積する。確認面近くで四耳壺が縦に 2 つに割れた状態で出土した。

**出土遺物 (図 50)** 遺物は総量でコンテナ 1/2 箱が出土した。陶器器、土師器坏皿、瓦器のはかに、古墳時代前期から古代までの土器が同量ある。

上記のように完形の陶器の他は、ほとんどが細片の資料である。土師器坏は範切底、糸切底ともにある。皿には完存する個体がある。皿 964 は範切底で口径 9.2cm、底径 7.1cm、器高 1.6cm を測る。

599 は四耳壺である。口縁部に目痕を残す。緑色不透明で薄い釉が高台内全面に施釉される。外底面に墨書きがあるが判読できない。

612 は滑石製壺である。全体を研磨し、孔の上縁部に細ずれが認められる。重量 36.1g。

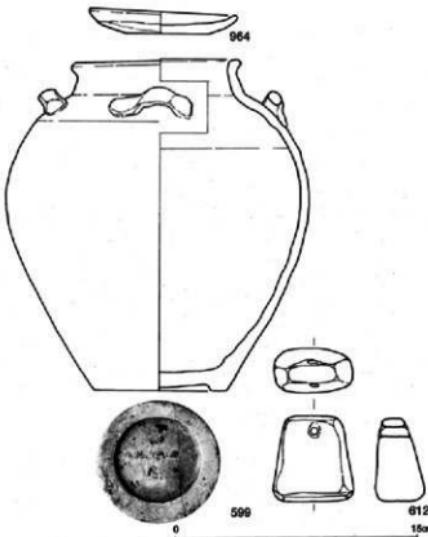


図 50 土塗 205 出土遺物 (1/3, 1/2)

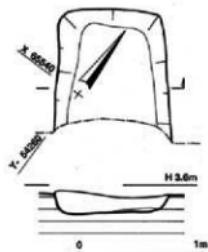


図 51 土壌 223 (1/40)

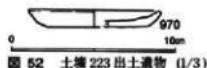
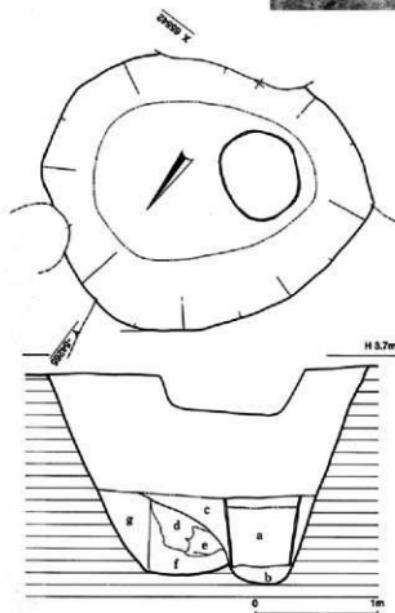


図 52 土壌 223 出土遺物 (1/3)



図 53 土壌 223 (南から)



a 黒褐色粘質土、一様。〔M241 井戸  
側〕  
b 暗褐色色。〔M241 井戸底〕  
c 黒褐色色、黄褐色色の互層。  
d 黄褐色色。

図 54 井戸 241 (1/40)

は丁寧に撫で調整され、底面が丸みをもつ。瓦器碗 972 は、内底面の中央が磨滅する。盤口壺 1008 は、無釉で胎土に粗粒砂を顯著に含む。

### 土壌 223 (図 51-53)

調査区南辺部で検出した。半ばが調査区外にある。平面ではおそらく隅円長方形、断面が浅い逆台形状を呈す。覆土は灰色粘土で全体に一様である。長さは現況で 1.1 m、幅 0.9 m、深さは 0.2 m を測る。覆土から、1 層底面に掘り込み面をもつことが考えられる。

**出土遺物 (図 52)** 遺物は少量出土した。大半が奈良時代以前の土器で、細片である。土師器壺皿は糸切底である。壺 970 は、口径 8.0cm、底径 7.0cm、器高 1.0cm を測る。陶磁器では細片で白磁碗、龍泉系青磁が出土している。

### 井戸 241 (図 54)

平面では梢円形状、断面は逆台形状を呈す。下半部での観察から重複して古い井戸があることがわかる。井戸側の木質は腐朽して痕跡のみであるが、縦方向の繊維痕跡がないことから、曲物を利用している可能性がある。

**出土遺物 (図 55)** 遺物はコンテナ 2/3 ほどの量が出土している。半ばが奈良時代以前の資料で、残りの大半は陶器である。

土師器の量は少ない。壺 971 がある。内底面

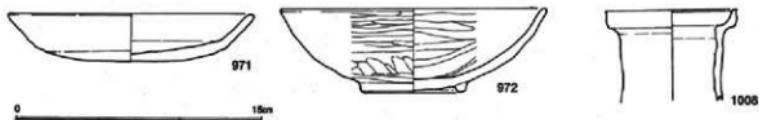


図 55 井戸 241 出土遺物 (1/3)

## 土壤 271 (図 56・57)

半ばが調査区外にある。擾乱で大きく破壊されているが、平面では不整な円形状、断面は逆台形状を呈す。覆土は黒褐色粘質土で、砂、黄褐色粘土との互層部分がある。覆土下半部では、他の同種遺構にみられるのと同様、灰層が褐色粘土と互層をなしている。全体に弓状に擁んで堆積している。径は 1.5 m、深さ 0.8 m である。

出土遺物 (図 58) 出土量はコンテナ 1/4 ほどの分量であるが、大破片の資料を含み、一括投棄された可能性がある。

土師器は少量で、細片が多い。皿 978 は口径 8.6 cm、底径 6.2 cm、器高 1.3 cm を測る。瓦器碗は 1 個体のほかは細片である。979 は内面と外面の下半部を中心粗い範磨きを行う。

小形の陶磁器は白磁のみである。接合して全形を復元できる碗が 3 個体あるほかは細片である。白磁皿 983 は、体部上位で内方に屈曲する。軸は底部近くに及ぶ (D IV-1 類)。白磁碗 980・981 は玉縁口縁で、軸は高台の一部に及ぶ。980 の内底面は丸みをもつが、981 では平らである。白磁碗 813 は外面に放射状の範描き文様、内面には柳描きの曲線を刻む。軸は一部高台に及ぶ。むらのある軸はオリーブ灰色を帯びる。外底面に墨書が残る。「□房」か。

## 土壤 272 (図 59・60)

1 面の遺構とするが、複数の小穴・円形の土壤と重複して下位に位置する。平面形が円形で断面は低い逆台形状を呈す。径 1.2 m、深さ 0.4 m を測る。覆土はごく軟質の砂で、粗砂が混じる。底面直上の灰層を含む覆土中から、ばらばらになった大形獸の骨が出土した。紙数の制約上、同定者による観察は別稿を俟つとして、内訳を略述すると、獸骨は四肢骨を主として頭蓋骨、椎骨を含み、解体された残滓として投棄されたものである。また、馬の歯が混じることから、その頭蓋骨も一括されていた可能性がある。



図 57 土壤 271 (南から)

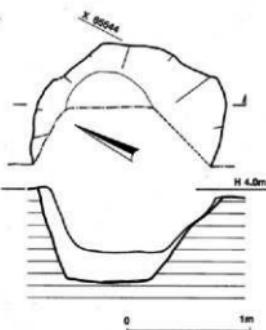


図 56 土壤 271 (1/40)

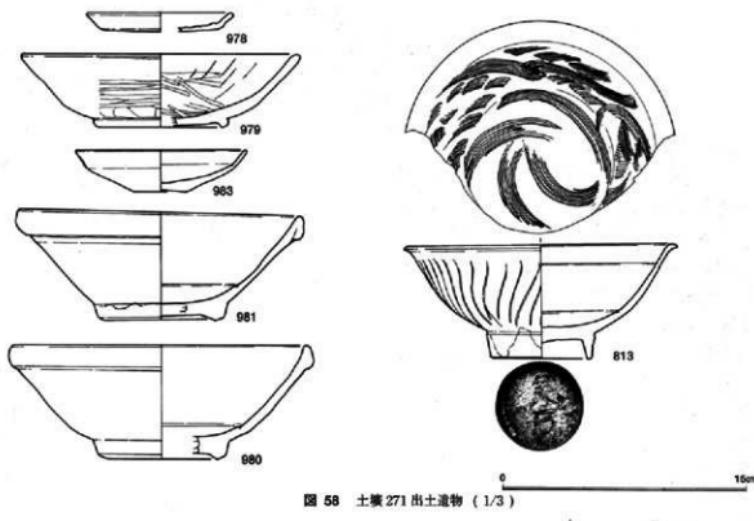


図 58 土壌 271 出土遺物 (1/3)

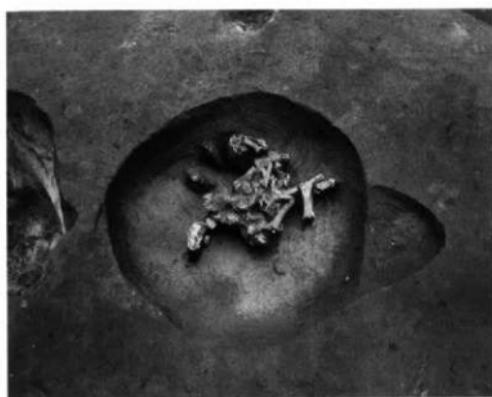


図 59 土壌 272 (西から)

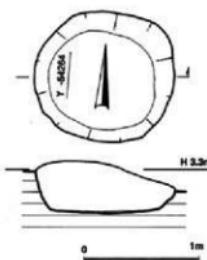


図 60 土壌 272 (1/40)

出土遺物 (図 61) 動物骨以外の遺物はコンテナ 1/5 ほどの分量出土した。大半は奈良時代以前の土師器、須恵器であるが、土師器壺皿 1009 は内面を平滑に仕上げ、底部が丸みをもつ。



図 61 土壌 272 出土遺物 (1/3)

## 2 第2面出土の遺構と遺物

### 土壙 86 (図 62・63)

井戸 134・遺構 135 と重複して新しい、平面形が椭円形の遺構である。断面では深い逆台形状を呈す。井戸 134 を井戸としてその井戸側の可能性を考えたが、底部の位置がずれており、別遺構とした。覆土は黒褐色粘質土と砂の互層である。上部で瓦が落ち込んだような状態で出土した。上部を復元して図示するが、その位置で長さ 1.0 m、幅 0.8 m、深さ 1.0 m を測る。

### 出土遺物 (図 64)

上記の瓦のはかに少量の陶器などが出土地した。土師器では碗高台の細片がある。土師器皿 984 は底切底で口径 8.2 cm、底径 6.4 cm、器高 1.1 cm を復元できる。碗類は白磁のみで、DV-2 類がある。

985 は陶器捏鉢である。胎土に粗粒砂を多量に含み無釉である (H-C 群)。内面の磨滅は認められない。

瓦は上述のように大破片で、3 点が近接して出土した。2 点が丸瓦の破片資料である (987・988)。いずれも外面に粗い格子目叩きを行う。工具は両者で異なる。内面に布目が残るが、987 の目は細かく、988 は粗い。両者とも胎土に粗砂を含み、焼成は堅緻である。987 では一部に光沢を生じている。

986 は平瓦である。瓦上面に細かな目の布目、下面に粗い格子目叩きを行なっている。格子目は丸瓦 987 に似る。上面の端部は工具で撫で、瓦上下面を撫でて仕上げる。下面では側縁に沿う方向の撫で調整後、端面部に沿って

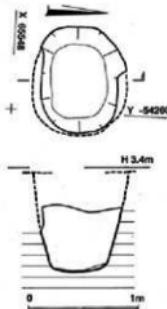


図 62 土壙 86 (1/40)



図 63 土壙 86・井戸 134・遺構 135 (北から)

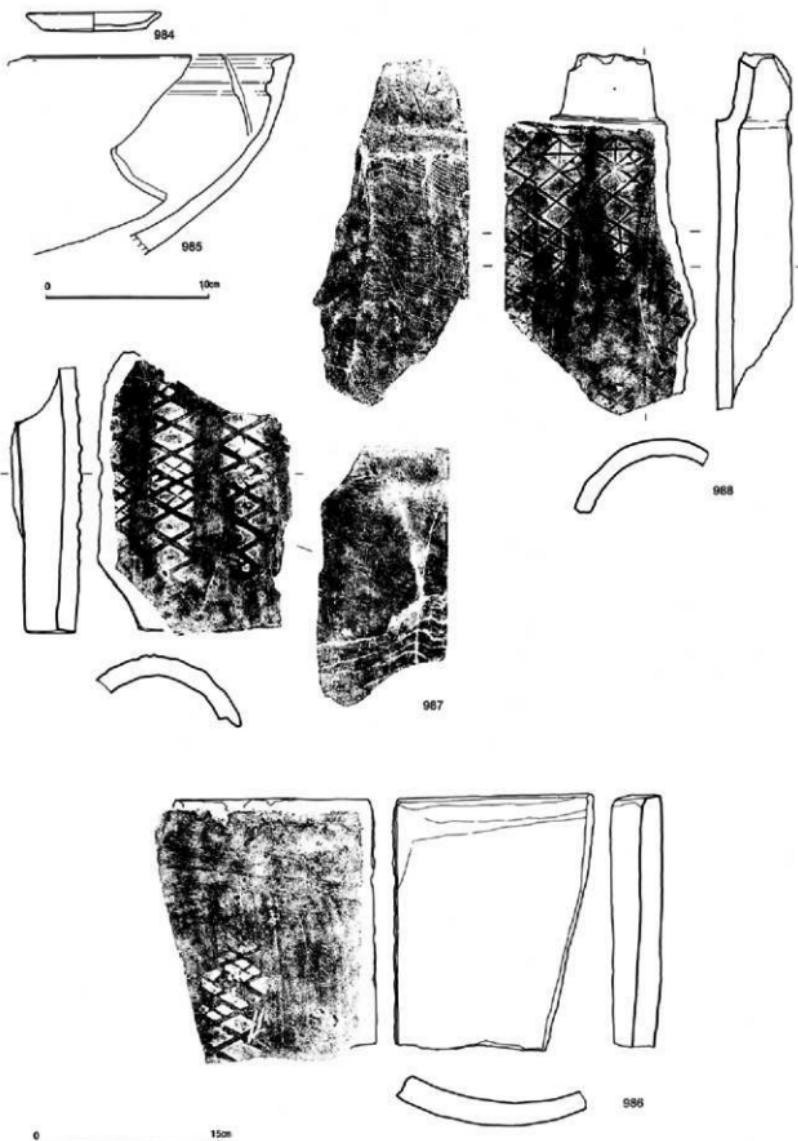


图 64 土坑 86 出土遗物 (1/3, 1/4)

撫で調整を行なっている。全体の形状は復元できない。

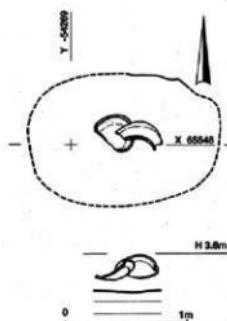


図 65 遺構 95 (1/20)



図 66 遺構 95 (西から)

#### 遺構 95 (図 65・66)

形状の不明な遺構である。肩部かと思われる変化がわずかに認められたが、下位の地山で掘形を確認することはできなかつた。土師器が 2 点重なつて出土した。出土遺物 (図 67) 288 は土師器皿である。底面を叩きあるいは押さえて調整したものか、外底面が細かく起伏し、底面がごく薄く仕上がつてゐる。断面では層状に分離する状態が見える。内面は底面に横方向の撫で調整を行なつた後、

口縁に沿う撫で調整を加えている。全面に化粧掛を施しているものか、橙色を呈す。短頸壺 289 は上半部の破片資料である。肩部以上の外面と口縁部の内面は器表が剥落しているが、全面に回転窓磨きを行う。内面のそれは粗である。外面下半部は先立つて窓削り調製を行なつてゐる。

#### 遺構 96 (図 68)

溝 119 に重なつた位置で検出した遺構である。溝と竪穴住居 158 と重複しており、溝自体の形状が不明確であるが、溝底部にあたると推定される位置からウマの歯が出土した。

同定者によれば、歯がみ合つたままの状態で埋没しており、頭部を溝底に埋置した可能性を考えることができる。溝 119 の時期は遺物からは明確にできないが、竪穴住居 158 と重複して新しい。

#### 遺構 115 (図 69・70)

平面では不整な円形の遺構である。断面が逆台形状をなす掘形の覆土中位から、井桁状の枠が確認できた。内部の覆土を掘りあげたところ、四隅に杭のような痕跡が認められた (図 69 平面) が、断

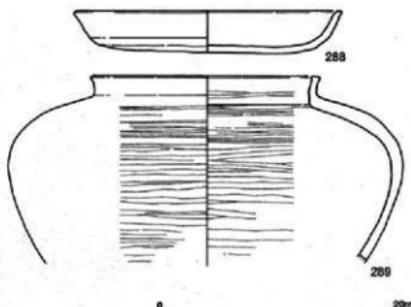
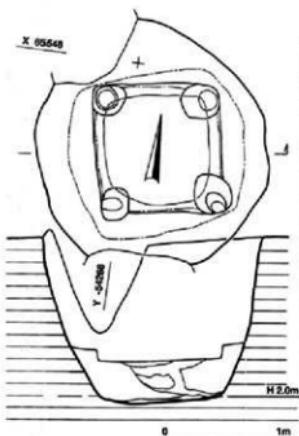


図 67 遺構 95 出土遺物 (1/3)



図 68 造構 96 ( 東から )



- a 淡黄色砂 (地山砂)  
b 黒褐色砂 (縞状の堆積)

図 69 造構 115 ( 1/40 )



図 70 造構 115 ( 北から )



図 71 造構 115 出土遺物 ( 1/3 )

911 は小形の須恵器壺である。912 は須恵器高台壺で平坦な底面のやや内側によって低い高台を貼り付ける。

面での観察を行なった結果では、枠状のものの痕跡を認めることができなかつた(断面)。下半部の土層は、枠範囲を超えて周囲の地山砂層からの白色砂が流れ込み、中央の縞状の黒褐色砂中に塊状になって入ったような状態を示す。板材を棒材で支えた枠を据えつけたような構造であつたものか。

**出土遺物 ( 図 71 )** 覆土中から少量出土した。大半は古墳時代前期の土師器、奈良時代前後の土師器、須恵器である。器形としては器台、竈、堀、高台壺、蓋などがある。このほかに少數の陶磁器が細片で含まれる。白磁碗 D IV 類、皿 D VI 類などがある。

### 井戸 134 (図 63・72・74)

土壌 86、遺構 135 と重複し、86 より古く、135 より新しい遺構である。掘形はすり鉢状をなし、埋土の掘り下げ途中で方形の井戸枠を確認したが、底面近くでは不明瞭となる。埋土は黒褐色砂である。掘形の径 1.8 m で深さ 1.2 m、確認できた井戸幅はややいびつな矩形で一片が 0.7 m から 0.8 m ほどの規模である。

**出土遺物** 埋土中から少量の遺物が出土した。多くは細片の資料である。極少量の土師器坏皿、陶磁器のほかは、大部分が、重複して古い遺構からのものと思われる土師器である。土師器坏に篦切底の細片がある。白磁碗には D IV 類、V 類、皿 D II 類が細片で混じる。厚手で縄目叩きの平瓦がある。

### 遺構 135 (図 63・73・74)

土壌 86、井戸 134 と重複し、いずれよりも古い遺構である。平面では梢円形状となり、断面は逆台形状を呈す。長さ 2.1 m、幅 1.6 m、深さ 1.2 m を測る。覆土は黒褐色砂で、掘り下げ中に円形の広がりを認めたが、下底部まで構築部材の痕跡なども無く、明確な井戸枠として確認することができなかった。

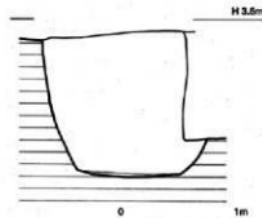
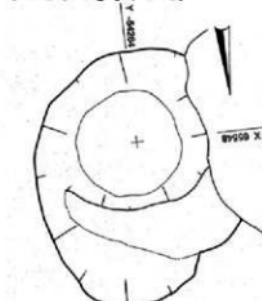


図 73 遺構 135 (1/40)

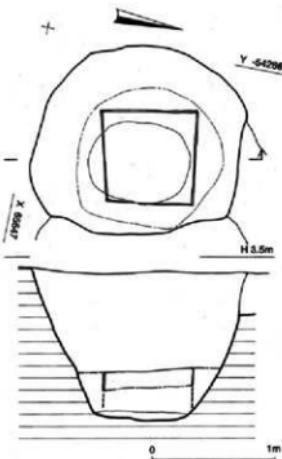


図 72 井戸 134 (1/40)



図 74 井戸 134・遺構 135 (南から)

**出土遺物 (図 75)** 総量でコンテナ 1/4 ほどが出土した。半ば以上が重複、隣接する遺構にかかわるとみられる土師器である。残りの大部分は陶磁器である。磁器碗類はすべて白磁である。土師器はごく少量の細片が出土した。皿に糸切底がある。

白磁碗には D IV 類、V 類、VI 類ほかがある。皿では D IV 類、VII 類がある。白磁皿 917 はほぼ完存する資料である。釉は全面に及ぶが、底面はその後に削り込まれ、ごく低い高台となる。釉は薄く透明でガラス光沢を呈す。体部下位で屈曲した内底面に毛描き

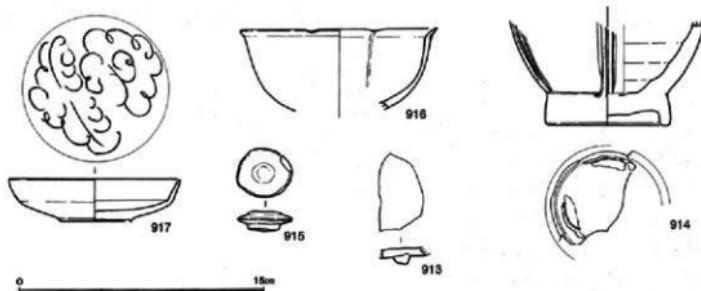


図 75 遺構 135 出土遺物 (1/3)



図 76 土壙墓 153 (1/40)

の文様が刻まれる。916はやや小形の輪花碗で、内面に隆線を付す。釉は灰白色でむらがある。

914は越州窯系青磁瓶である。範により、高台まで達する2条の隆線を削り出し、体部を5区分する。高台内底面に目痕が残る。釉は外面の全面に施される。むらがあり、半透明で、オリーブ黄色に発色する。

915は蓋である。嵌合部の径2.0cmを測る。頂部に施釉される。透明でガラス光沢を呈し、明青緑色に発色する。913は須恵器高台壺である二次的に移動したものであろう。内底面に墨書きを残す。

#### 土壙墓 153 (図 76・77)

溝 154・155と重複して下位にある遺構である。溝により大部分を破壊されている。楕円形の掘形で、横断面は逆台形状を呈す。主軸を北から $10^{\circ}$ 東にとする。覆土は黒褐色砂である。釘などの出土は無く、形

状からも棺があったとは考えられない。人骨は頭部と下肢の一部が遺存したが、取上前に崩壊した。出土状態から、頭位は北、顎は西方を向いて横臥し脚は曲げていた状態が復元できる。

**出土遺物** 遺物はごく少量出土したのみである。副葬品とできるものではなく、埋土に混じったものである。土師器では碗とみえる細片がある。



図 77 土壙墓 153 (北から)

### 溝 154・155 (図 78)

調査区内で湾曲しながら南北方向に走る。溝 155 は溝 154 と重複しそれよりも古い。北半では完全に重なっている。調査区内土壤状になって終わる。覆土は黒褐色砂でやや粘土を含む。北半部の西側に広がる黒褐色砂層はこの溝の埋没の最終段階に堆積したものである可能性が高い。断面はともに逆台形状を呈す。溝 154 は中央部で幅 0.7 m、深さ 0.5 m、溝 155 は幅 0.6 m 以上、深さ 0.4 m となる。溝底面は南北端で高低差はない。

**出土遺物** 溝 154 からはコンテナ 1/2 ほどの分量が出土した。半ばは古墳時代前期から奈良時代にかけての土器が大半を占めるなかにごく少量の土師器壺皿、陶磁器が出上した。土師器は碗、高台壺、丸底の壺が細片で出上している。陶磁器は白磁碗 D V 領他の細片がある。

溝 155 からは、少量の遺物が細片で出土したのみである。古墳時代から古代までの土器類である。

### 土塗基 176 (図 79・81)

不整な格円形状の平面形で、断面が逆台形状を呈す。長さ 18 m、幅 1.1 m、深さは 0.3 m を測る。埋土は黒褐色砂質土である。埋土中から釘などの出土はなく、痕跡もないことから棺の使用はなかったものと考えられる。底面に人骨が遺存する。頭骨、腕骨、下肢骨が遺存する。頭位を北にとり、東方を向いて横臥した状態で埋葬されたものと観察できる。黒色土器碗が、人骨胸部に載るような位置から正立して出土した。副葬品と考えられる。

**出土遺物 (図 80)** 上述するほかは土器が少量出土しているが、埋土に混

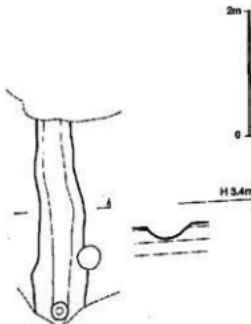
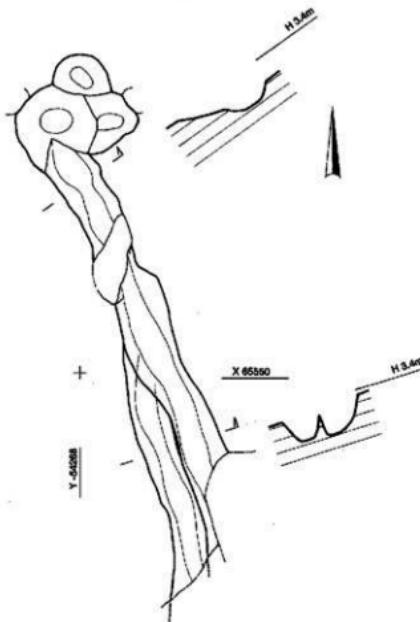


図 78 溝 154・155 (1/80)

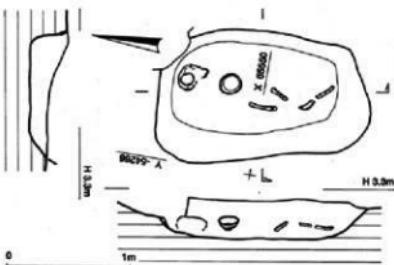


図 79 土塚墓 176 (1/40)

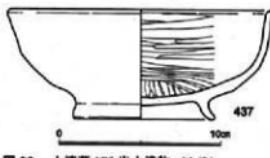


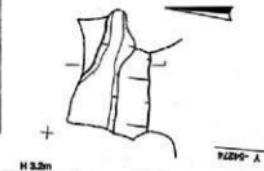
図 80 土塚墓 176 出土遺物 (1/3)



図 81 土塚墓 176 (西から)

じって散漫に出土した細片の土師器・須恵器で、古墳時代・奈良時代に属する資料である。

黒色土器 437 は完存する。外面は回転を利用した撫で調整、体部内面には 6 cm ほどの単位で往復する範磨きを、内底面にも往復する範磨きを行う。内面を焼す。内面の全体に火跳ね状の剥落が広がる。口径 16.2cm、高台径 8.8cm、器高 5.5cm を測る。



### 3 第3面出土の遺構と遺物

#### 溝 103 (図 82)

調査区北壁にかかるて東西方向に走る。3 区では井戸、土塚と重複し、ごく一部が遺存する。溝の上部は崩落しながら埋没したようで、現状は溝中心から 1.5 m の幅まで緩い傾斜で立ち上がる。覆土は黒褐色ないし暗褐色の砂で、流水の痕跡は認められない。安定した環境下で緩慢に埋没していったものと考えられよう。溝の北側の縁は調査区外になる。溝の底面での幅 0.7 m を測り、埋没時の幅は 3 m 以上である。深さは 0.4 m を測る。

**出土遺物** 遺物はコンテナ 1/4 ほどの分量出土した。すべて細片の土器である。古墳時代前期から奈良時代にかけての土師器・須恵器が大半を占める。土師器の類は器表の

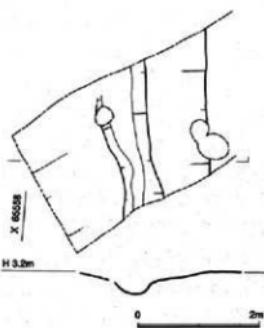


図 82 溝 103 (1/80)

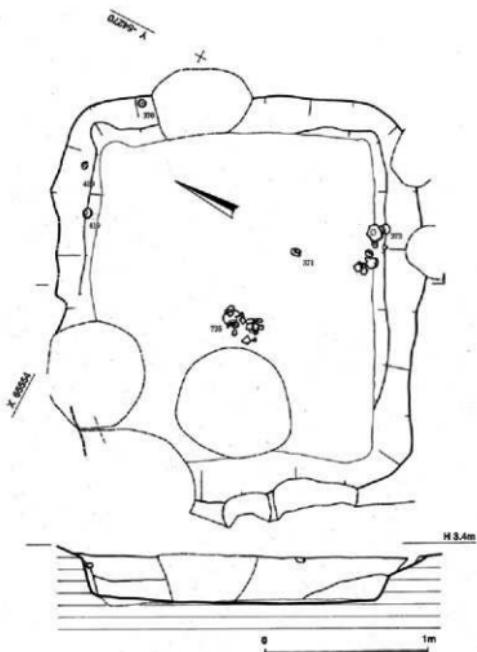


図 83 壁穴住居 157 (1/60)



図 84 壁穴住居 157 (北から)

荒れが著しい。奈良時代を中心とした須恵器が最も多く、遺存状態もよい。器表が荒れた白磁皿、陶器のほか、黒色土器が出土したが、ごく少数である。

#### 壁穴住居 157 (図 83・84)

平面では隅円の長方形、断面では上半部が開いた逆台形状を呈す。壁上半部が大きく開く部位がある。埋没時の崩落の結果であろうか。長さ 4.9 m、幅 4.4 m、深さ 0.6 m を測る。覆土は上部が黒褐色砂、下部が暗褐色砂となり、レンズ状に堆積している。北壁際には暗黄褐色砂が堆積する。床面を精査したが竪穴は確認できなかった。完形の個体を含む土器が確認面近くの壁に沿って流れ込むようにして出土し、壺が中央の床面から、潰れた状態で出土した。

**出土遺物 (図 85)** 総量でコンテナ 2 箱出土した。破片資料の大部分は壺である。

碗 374・420・419・749・737 のうち 4 点が完形の資料である。器表を撫で調整により仕上げる 374・420 と、範磨きによる 419・749・737 がある。前者の胎土はやや砂質で、器表は淡黄色を呈す。後者は精良で、橙色を呈す。377 は脚部の資料である。外面が橙色を呈す。

小形丸底壺 (753・755・744・754・373) は、完形の 373 を除き小破片である。いずれも胎土は精良で、橙色を呈す。373 は、体部の外面を中心に火跳ね状の剥落が広がる。外面は縦方向の刷毛目調整後、範磨きを加える。

壺は床面で出土した 735 のほかに口縁部の小破片 743・741 を示す。735 は体部の一部を欠く。器表は鈍

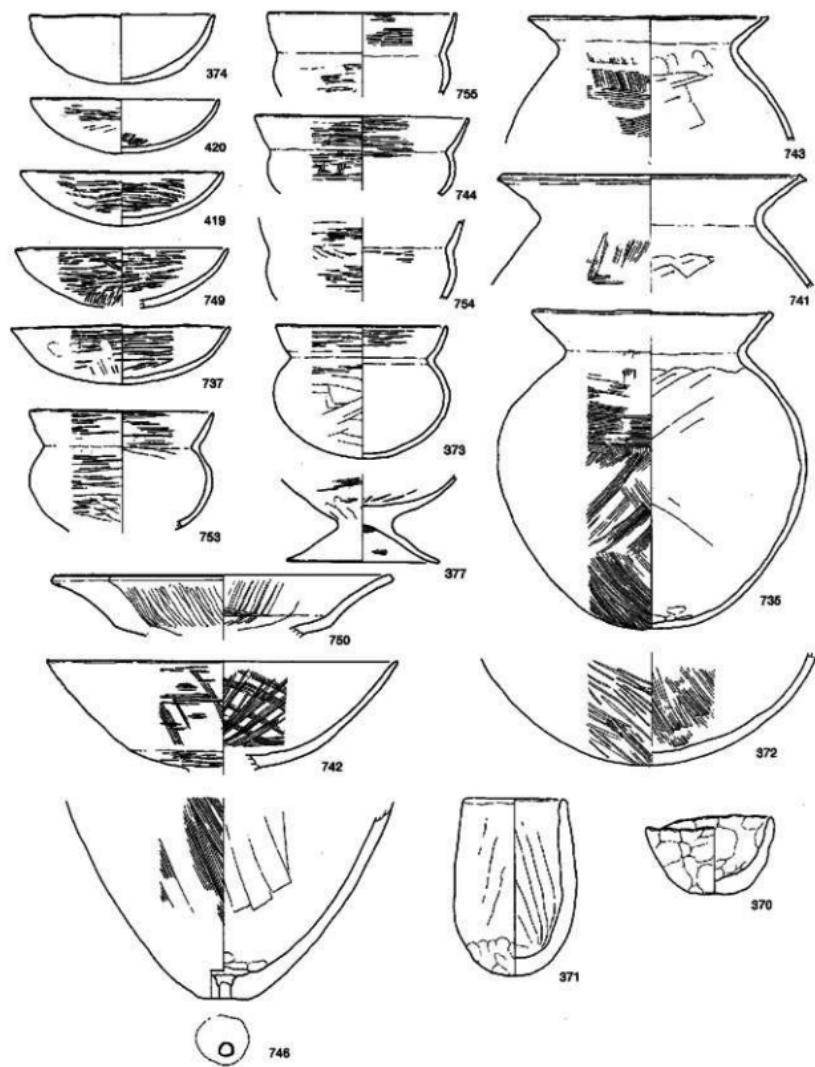


図 85 垂穴住居 157 出土遺物 (1/3)

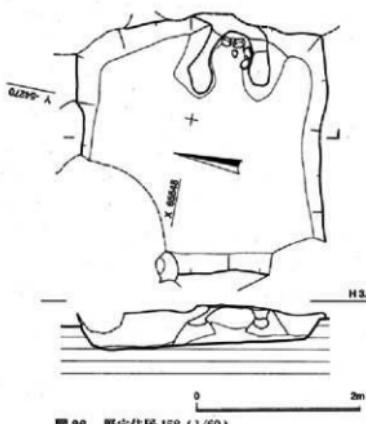


図 86 竪穴住居 158 (1/60)



図 87 竪穴住居 158 (西から)



図 88 竈 172 (西から)

い橙色で、底部から肩部の内面が暗褐色に変色する。口径 14.4cm、胴部径 18.1cm、器高 18.9cm を測る。他は覆土上部から多く出土した。743 はにぶい黄橙色、741 は浅黄橙色を呈す。

高坏は坏部を示す。750 は胎土に粗砂を含み、742 ではごく精良である。窓磨きを 750 は乾燥前に行ない、742 では暗文となる。372 は壺底部である。胎土に粗粒砂を顯著に含み外表面は淡赤橙色を呈す。746 は瓶底部である。平底状の底部に 1 孔を焼成前に穿つ。胎土には砂粒を大量に含む。371 は蛸壺である。胎土は粒状性をもつ。口縁の一部を欠く資料である。370 は手捏ね土器である。ほぼ完存し、内面は黒色を呈す。

#### 竪穴住居 158 (図 86~88)

縦 3.2 m、横 3.1 m を測るほぼ方形の住居である。

断面は逆台形状を呈し、掘形底面までの深さ 0.4 m を測る。竈 (172) を東辺のやや偏った位置に造り付けている。黒褐色砂・暗褐色砂で埋まる。掘り下げ途中で竈構築材の粘土が流れたように広がっている面があり、これが床面であった可能性がある。調査では住居の全体に確実な面として捉えることはできなかった。掘形まで掘りあげて底面を精査したが、柱穴は検出されなかった。

竈 172 は袖部が遺存する。暗褐色粘土混りの黒褐色粘質土で構築されており、火床部分に土器が投棄されたような状態で出土した。

**出土遺物 (図 89)** 竈部を含めてコンテナ 1/3 ほどの分量が出土した。大半は細片であるが、完形の資料も含まれている。土師器が大半を占め、残りの大部分が須恵器である。

921 は須恵器蓋である。頂部に「×」印の一部とみられる細線が刻まれる。920 は竈部から出土した土師器蓋である。縁部の一部を欠く。上面では回転窓磨きを行う。上下面に回転窓磨きを施す。胎土は白色の砂

粒をわずか含み、橙色を呈す。口径は 18.9cm、器高は 3.0cm を測る。

高台壺 990・991 はいずれも小破片の資料である。胎土に粗粒砂を顕著に含む。992 は土師器高台壺で、1/3 ほどが遺存する。内外面に回転箝削りを行なっている。胎土には夾雜物は少なく、体部の

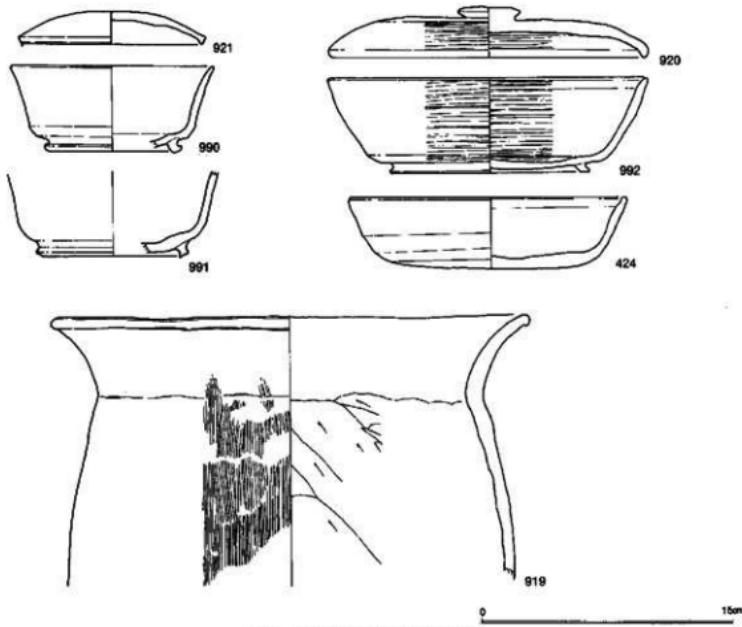


図 89 整穴住居 158 出土遺物 (1/3)

外面は橙色を呈す。

424 は土師器平底壺である。覆土上位から住居内に落ち込むような状態で出土した。回転箝削りが外底面から体部 1/3 の位置まで及ぶ。体部・口縁部の内外面は回転を利用した撫で調整、内底面では横方向の撫で調整を行う。完形で、口径 16.2cm、底径 12.1cm、器高 4.2cm を測る。胎土に粗粒砂を含み、にぶい橙色を呈す。

919 は土師器壺である。胎土に粗粒砂を顕著に含む。図示しないが、円筒埴輪とみられる細片資料がある。外面の縱方向の刷毛目調整上に赤色顔料が残る。

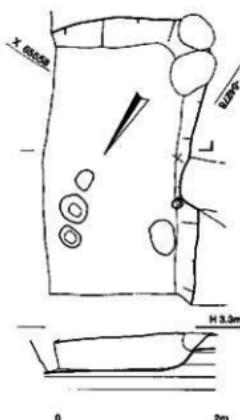


図 90 整穴住居 159 (1/60)

調査区北西隅で検出した。大部分が調査区外となる。溝 103 と重複してそれよりも古い方形住居である。壁はやや傾斜をもつ。深さ 0.4 m を測る。覆土は暗褐色砂で一様に堆積している。

出土遺物 (図 91) 遺物は少量の土師器が出土した。418・756

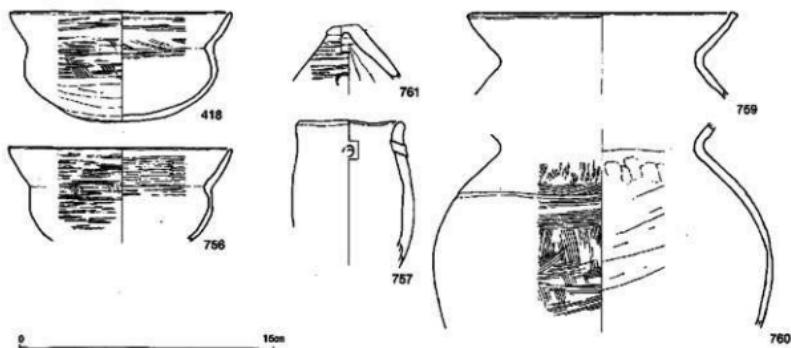


図 91 積穴住居 159 出土遺物 (1/3)

は小形丸底壺である。体部下半を窓削り後、外面と内面の上半部を窓磨きにより調製している。418・756とも胎土に少量の砂粒が混じるほかは精良である。418の胎土は鈍い橙色、756の器表は橙色を呈す。

761は器台脚部で底部を欠く。胎土は精良で橙色を呈す。759・760は壺である。胎土に粗粒砂を含む。757は鉢壺である。胎土は砂質で細縞を含む。

#### 積穴住居 161 (図 92・93)

1区と2区にかけて検出した。長方形の住居である。東端部が調査区外にある。2区では東辺部にベッド状造構のような地山の段を検出した。断面は開いた逆台形状を呈す。現況で南北壁間の距離 3.9 m、西壁から東壁間は 4.1 m 以上である。深さは 0.7 m を測る。覆土は上位が黒褐色砂で、2層との区分が難しい。下位は暗褐色砂で、レンズ状に堆積している。底面は地山面である。中央部で焼上が検出されたことから床面も近い位置にあったものか。柱穴は確実なものは確認できない。底面で検出した小穴があるが、いずれも浅い。遺物は床面から出土した他に覆土中の、特に黒褐色砂層に集中して出土した。また下位の覆土から鉢が出土した。

**出土遺物 (図 94・95)** 遺物は総量でコンテナ 2 箱ほどが出土した。大

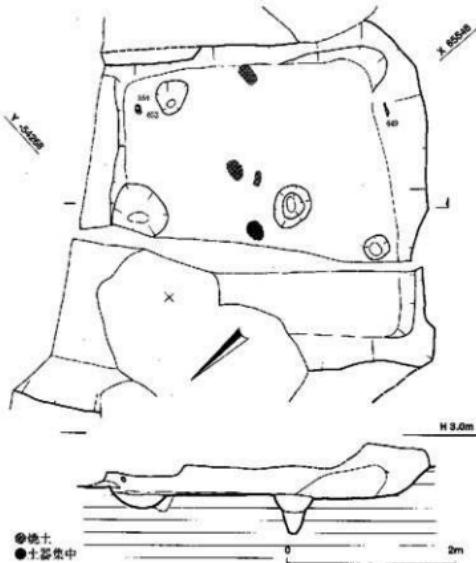


図 92 積穴住居 161 (1/60)



図 93 壁穴住居 161 (東から)

半は土師器壺が占める。

778・779は小形丸底壺である。小片である。778は外面に範磨きを行ない、胎土は精良で器表は橙色を呈す。779は内外面とも撫で調整を行う。胎土には砂粒を顯著に含む。

777(図95)は高環坏部である。小形で内外面に範磨き調整を行う。内面では放射状の暗文となる。器表は橙色を呈す。784・653・654・781は高環脚部である。784・653・654は上半部がやや膨らみをもち、裾部の穿孔は焼成後に行う。上半部外面には細かな範磨きを行う。781

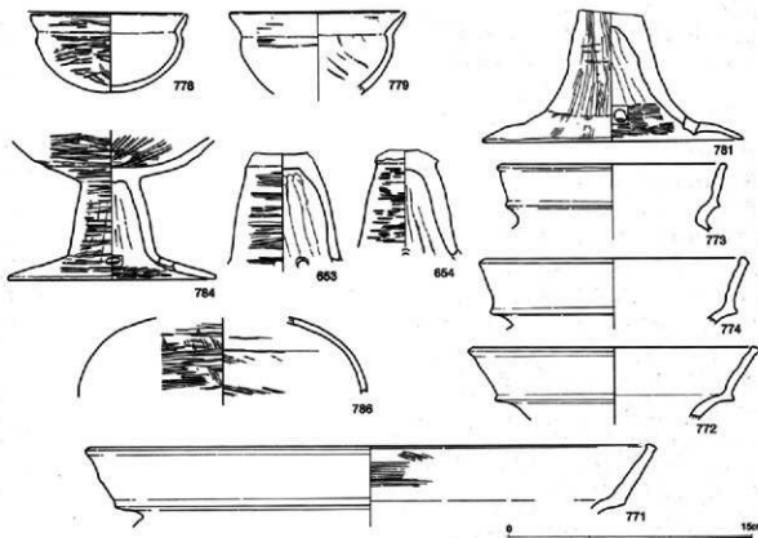


図 94 壁穴住居 161 出土遺物 1 (1/3)

の上半部は裾に向かって開き、透し孔は焼成前に穿孔される。上半部には縦方向の粗い範磨きが行われる。653・654は裾部を打ち欠いているようで、脚部側を向かいあわせにした状態で出土した。何らかの意図をもって埋納されたものとみられる。

786は長頸壺である。体部上半部の小破片で、胎土は精良、器表は橙色を呈す。773・774・772・771は二重口縁壺口縁部である。細片、小破片の資料で、773・774は器表が灰白色を呈す。773の外

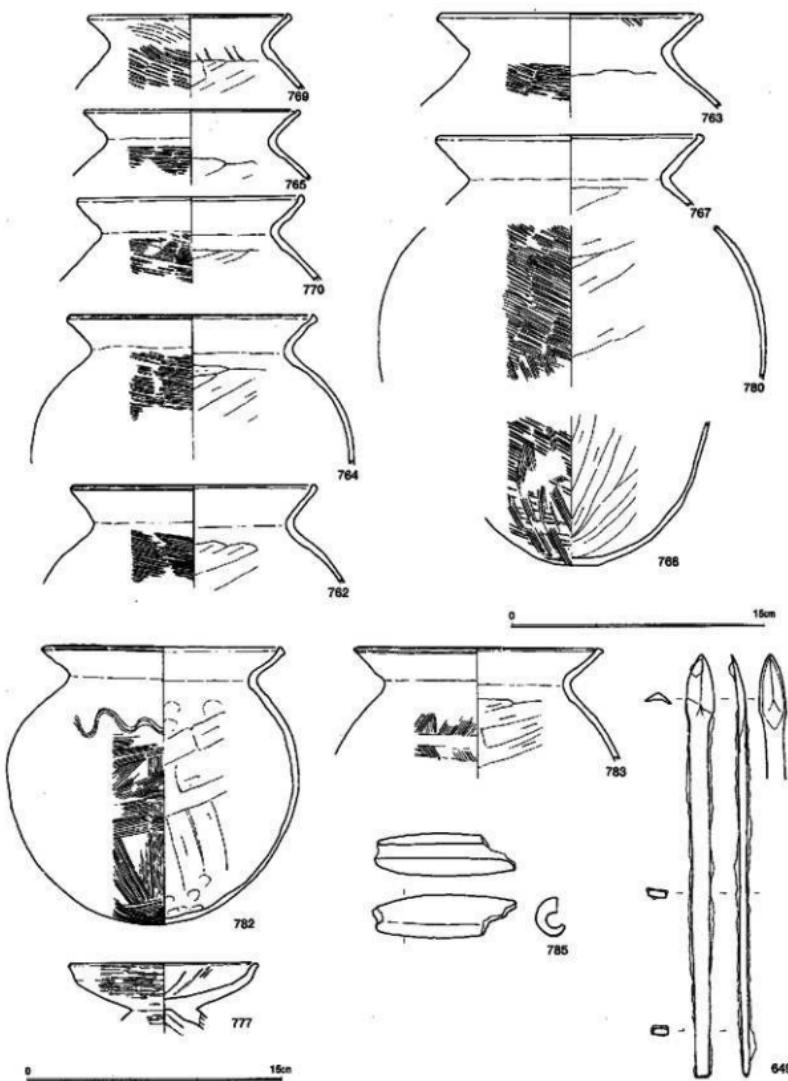


図95 積穴住居 161 出土遺物 2 (1/3, 1/2)

面には煤状の付着物がある。772は外面が灰色を呈す。771は大形で器表は灰白色を呈す。

甕は破片で多量に出土したが、細片となっており、接合して形状を復元できる資料は少ない。

769・765・770・764・762・763・767・780・768は外面に叩き目調整を行う甕である。叩き目は精粗

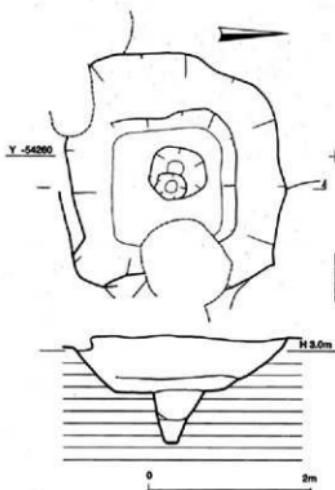


図 96 槫穴 275 (1/60)



図 97 槫穴 275 (東から)

がある。器壁は薄く、中央部が黒色を呈す。器表は灰白色を呈す。764は外面の口縁端まで黒褐色の付着物が残る。780は体部上半部小破片で右下がりの叩き目が密に残る。768は底部小破片である。叩き調整後、底部付近には細かな単位の刷毛目調整を加え、小さな底面を形成している。782・783は外面に刷毛目調整を行う壺である。782は住居底面から出土した。肩部に2条の凹線で波状文を全周させる。底部はやや平坦である。器壁は薄く中央部は黒色を呈す。器表は淡橙色を呈す。口縁端までの外面全体に黒褐色の煤状の付着物が残る。とくに下半部には斑状に厚みをもって付着している。783は口縁部の細片である。胎土は灰白色を呈す。

785は土鍤である。半ばが遺存する。にぶい橙色を呈す。649は鉈である。完存する。刃部は反りをもち、横断面「へ」字状を呈す。切っ先まで鋭利な刃部が遺存する。長さ16.7cm、刃部長2.4cm、同幅1.0cmを測る。

#### 櫛穴 275 (図 96・97)

平面では隅円方形、断面は逆台形状を呈す。中央に土壙状の落ち込みがある。覆土途中から確認でき、井戸の可能性を考えたが、断面が逆台形状となり底部は狭い。別遺構の重複か。長さ3.0m、幅2.7m、床までの深さ0.5m、土壙底までの深さ1.2mを測る。

覆土は黒褐色砂である。上部は薄層を成す様に見えたが下部は一様である。

**出土遺物 (図 98)** 総量でコンテナ1/4ほどの分量が出土した。完形、大破片がある。

727は土師器蓋である。上面に範削りを行なっている。上面は回転を利用した、内面は手持ちの範磨きで

仕上げる。胎土にわずか砂粒を含み橙色を呈す。730は須恵器蓋である。つまみ部を欠失する。

732・728・731は須恵器高台壺である。内外面とも撫で調整を行なう。278の高台内の外底面には刷毛目調整が行われている。731はほぼ完形の資料で、外底面には工具による一字に刻線がある。

989は土師器壺である。小破片の資料である。大形で、体部上部で屈曲する。底部に粗い範削りが行われている。体部、内底面では回転を利用した撫で調整後、外底面には回転を利用した範磨き調整、内面の体部には、上下に分けて放射状の、内底面には二重に螺旋状の暗文が施されている。胎土は精

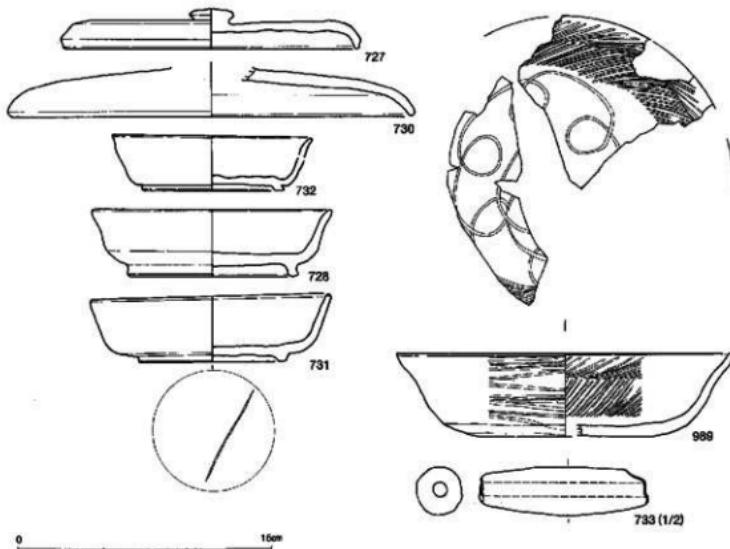


図98 穫穴 275 出土遺物 (1/3)

良で明赤褐色を呈す。よく似た胎土、色調、同様な暗文を施文する細片が、土壙 203・205、竪穴住居 158 などから出土している。在地の土器とは思われない。類例には平城京左京一条三坊 SD485 出土壙 A I 類がある<sup>(1)</sup>。

(1)『平城京発掘調査報告 VI』 奈良国立文化財研究所 1975

### III まとめ

以上、時間の制約上限られた範囲の遺構について報告した。

本地点の時期区分を考えると以下のようなものとなろう。

遺構の時期は大きく 5 区分できる。

第 1 期 方形の竪穴住居 157・159・161 が散在する。3 棟を確認した。古墳時代前期。

第 2 期 竪穴住居 158 の他に方形の竪穴 275 を調査した。同時期の遺物は周辺遺構から満遍なく出土する。奈良時代。

第 3 期 土壙墓 153・176 10 世紀後半から 11 世紀前半。

第 4 期 円筒状を呈し、多量の灰で埋まる土壙 (10、11、13、14、93、205、271) が特徴的である。井戸 134。12 世紀後半～13 世紀前半

第 5 期 土壙 9・12、土壙 179・223、井戸 181・183 を調査した。細かくみると、浅い位置から掘り込んだ遺構 (土壙 179・223、井戸 181・183) と低い位置に掘り込み面があると思われる遺構 (土壙 12) があり、さらに区分できよう。13 世紀後半～14 世紀前半。

## 報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 巻次	はかた 93 博多 93 博多遺跡群第133次調査報告 1					
シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 発行機関 所在地 発行年月日	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第764集 杉山富雄 撰 福岡市教育委員会 〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 2003(平成15)年3月31日					
ふりがな 所取遺跡名 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 130	東経 00121	調査期間 2001.10.10 ~ 2001.12.26	調査面積 285m <sup>2</sup>	調査原因 事務所ビル建築
博多遺跡群 福岡県福岡市 博多区祇園町 355-1	33° 35' 16"	135° 24' 56"				
所取遺跡名 遺跡 博多遺跡群	種別 主な時代 遺跡 占墳時代～ 室町時代	主な遺構 整穴住居、土壤、 土壤幕、井戸、溝	主な遺物 土師器、須恵器、 白磁を主とした輸入 陶磁器。	特記事項		

**博多 93**

- 博多遺跡群第 133 次調査報告 -  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 764 集

2003 年 3 月 31 日

編集・発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神 1-8-1  
印刷 有限会社プリコム  
福岡市博多区冷泉町 1-20